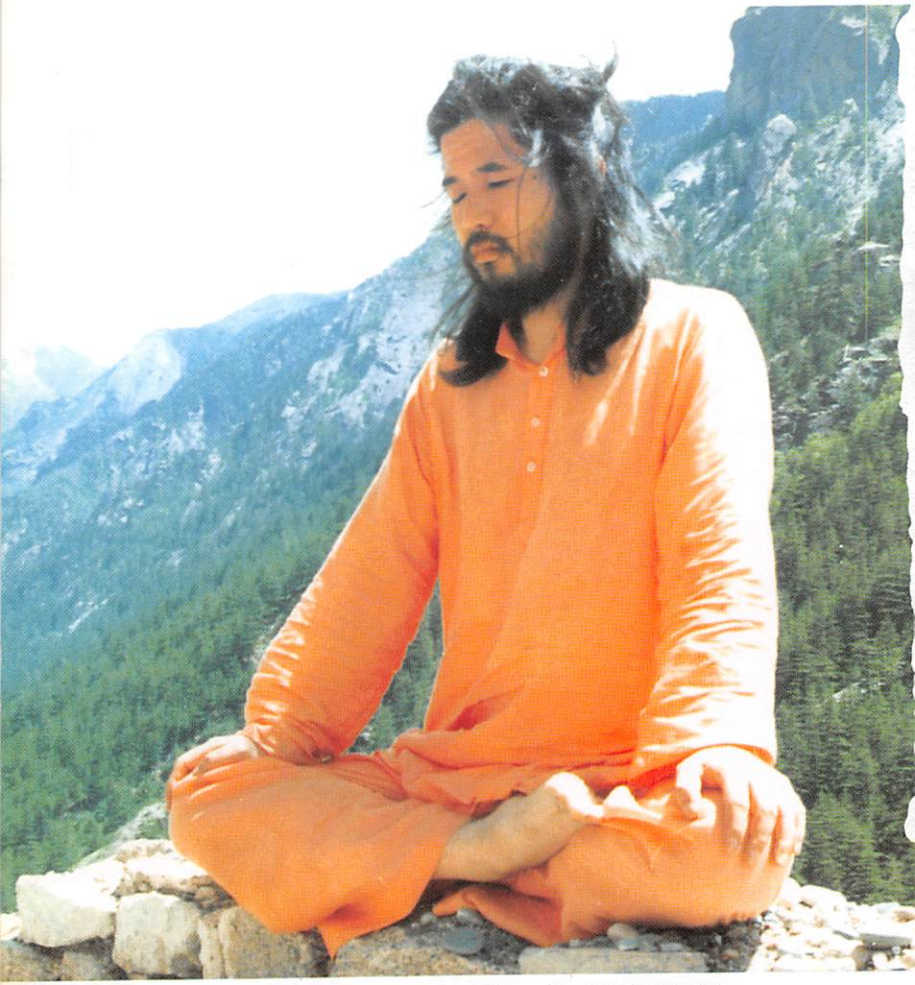
甦る聖者伝説

The Legend of the Saints Revives.

真の解脱者の証明をなす！

オウム出版広報編集部 編



真の解脱者は、〝サマディ〟へと至り、そして生死を超越する。
その証を、麻原彰晃尊師の愛弟子たちが、今ここになす。

断水断食、空気なしで五日間……命をかけて、聖者の証明〝アンダーグラウンド・サマディ〟に挑む弟子たち。果たして、伝説は甦るか？

はじめに——サマディ、それは聖者に至る道

聖者。あなたは、この言葉を聞いて、どういう姿を思い浮かべるだろうか？

「うーん、そうね。お釈迦様とか、キリストとか……。普通の人みたいに欲がなくって、不思議な力を持っている人。」

おそらく、こういう感じではないだろうか。

古今東西、この聖者と呼ばれ、民衆から敬愛されたひと握りの人間がいる。彼らは確かに、わたしたち普通の人とは全く違っていた。純粋透明な心と、神のような賢さと、そして不思議な力を持っていたのである。仏教的な言葉で言い換えると、煩悩がなく、大いなる智慧と人間を超えた力、つまり神通力を持っていた。そして、その力で多くの奇跡を現わし、人々を救済したと

いわれている。

平凡な力しかなく、どんなに頑張ったとしても、結局平凡なことしかできないわたしたちには、絶対真似のできない人生――。その素晴らしい生き様を伝える伝説が、現代にも数多く残っている。

こう言うとあなたは、

「そういう特別な人はいいなあ。どうして、わたしは平凡に生まれてしまったんだろう。」

とため息をつくかもしれない。

確かに、彼らは特別だったといえるだろう。わたしたちと同じようにこの地上に生まれて、聖者と呼ばれるようになったのだから。しかし、である。わたしたちと彼らは、もともと魂の構造自体が全く違っていたのだろうか？わたしたちはどんなに頑張っても彼らのようになれないのだろうか？

答えは「NO！」である。

聖者に至る道は存在するのだ。実際、今、麻原彰晃尊師の指導によって、その弟子たちがいにしえの聖者の境地に達しつつあるのである。

そして、その聖者に至る道のキーワード、それが〝サマディ〟なのである。

「サマディ——？」

そう、このサマディに入ることができなければ聖者とはいえず、最高のサマディに入れる者のみが、最高の聖者となるのである。いにしえの聖者たちも数多くのサマディ伝説を残しているのだ。

サマディ伝説——。それは、完全にわたしたちの常識を超えた奇跡である。聖者に至る道を明かす前に、まずは、あなたにこのサマディ伝説から語らなければならないだろう……。

甦る聖者伝説

The Legend of the Saints Revives.

真の解脱者の証明をなす！

はじめに —— 1

第一章　甦る聖者伝説 —— 7

一、解脱者の証、アンダーグラウンド・サマディ

二、なぜ、呼吸が停止しても生きていられるのか

三、運命の日

第二章　一番目の奇跡
聖者マイトレーヤ智徳成就者　49

第三章　〝死生智〟で来世を知る
聖者ヤソーダラー最上善逝　71

第四章　時空を超えて聞こえる神々の声
聖者マンジュシュリー・ミトラ供養値魂　111

第五章　断水断食・超覚醒で五日間
聖者ミラレパ供養値魂　139

第六章　過去世への旅
聖者サクラー供養値魂　155

第一章　甦る聖者伝説

一、解脱者の証、アンダーグラウンド・サマディ

◉驚異のサマディ伝説

世界各地に今も伝えられる驚異の〝サマディ〟伝説――。そのいくつかをご紹介しよう。

まず、サマディで最も有名な聖者といえば、なんといっても仏教の開祖、サキャ神賢（釈迦牟尼）であろう。サキャ神賢だけではなく、その教えを実践した弟子たちのサマディのエピソードも、数多く仏典には記されている。

ここでは、その中でも有名なものを一つ挙げたい。「ウルヴェーラの奇跡」として知られている逸話である。サキャ神賢は、ここで、なんと三千五百の大神通力をウルヴェーラ・カッサパに対して示したそうだが、その中でサマディに入って「テレポーテーション」を見せたというのが次の記述である。

「そのとき、時ならぬ大雨が降り、大洪水が起こった。世尊がとどまっておられる場所が水で覆われた。そこで、世尊にはこのような思いが生じたのである。『水を四方に退けて、その真ん中で、ほこりに覆われた地面を※経行（きんひん）しよう』と。

そこで、世尊は水を四方に退けて、その真ん中で、ほこりに覆われた地面を経行されたのである。そのとき、結髪のウルヴェーラ・カッサパは、『偉大な出家修行者が、水に運び去られることがあってはならない。』と、船で多くの結髪者たちと共に、世尊がとどまっておられる場所に行った。結髪のウルヴェーラ・カッサパは、世尊が水を四方に退けて、その真ん中で、ほこりに覆われた地面を経行されているのを確かに見た。見ると、世尊にこう申し上げた。

『偉大なる出家修行者よ、ここにいらっしゃったのですね。』

『カッサパよ、わたしはここにいる。』と、世尊は空に昇って、船の上に立たれたのである。そこで、結髪のウルヴェーラ・カッサパには、このような思いが生

※精神を集中して歩く修行。

じた。

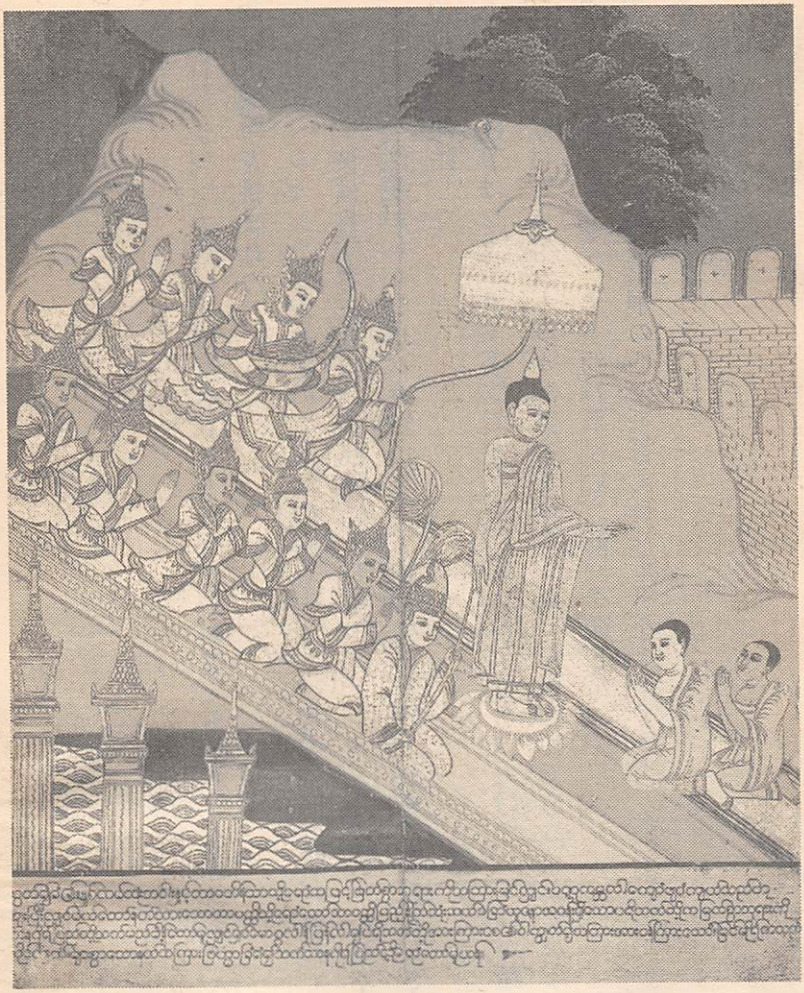
『実に、偉大なる出家修行者には、大いなる如意と大いなる威神力がある。なぜならば、水を取り除いたからだ。しかし、わたしのような供養値魂ではないのだ。』」

（律蔵・大品・ウルヴェーラの奇跡）

サマディに入って見せた神通力により、サキャ神賢はここで、外道の修行者であったウルヴェーラ・カッサパを教化したといわれている。この後、いわゆるカッサパ三兄弟が、一千人の弟子と共にサキャ神賢に帰依したのは有名な話である。

◉国王の亡骸に入って——シャンカラのサマディ

サキャ神賢が入滅されて、約八百年後。聖地インドにシャンカラが生まれた。ヴェーダーンタ学派の中の不二一元論派の創始者であり、インド最大の哲学者と称えられるあのシャンカラである。このシャンカラにもすごいエピソードが残っ



ている。

ある日、シャンカラは、哲学者バーラティとその妻ミトラという著名な二人の学者より論争を挑まれた。

ところが、シャンカラが夫妻の大邸宅に到着すると、邸宅の門は閉ざされていた。そこで、彼は哲学者夫妻のいる部屋にテレポーテーションして入ったのである。夫妻は突然現われたシャンカラにひどく驚いていたが、気を取り直してさっそく論争を開始した。

しかし、論争はシャンカラ優位で進んだ。初めバーラティだけでしていた論争も、しまいには二人で立ち向かわざるを得なくなっていたのである。夫妻が今にも負けようというとき、ミトラはこういう問いを発した。

「では、あなたは恋の真理について答えられますか？　恋とは、そして性とはいかなるものでしょうか？」

シャンカラは答えられなかった。なぜなら、清廉潔白な学僧シャンカラは、恋について全く知らなかったからだ。初めて返答に窮したシャンカラは言った。

「しばらく待ってください。一カ月後に返答をいたします。」

どうしたらいいかと悩んだシャンカラ……、そんなある日、シャンカラはアマラカという国王の葬儀に出会った。そこで彼は弟子を集めてこう言ったのである。

「わたしは二週間の間、この肉体から抜け出す。それはあくまで仮死状態であって死んではいないから、その間この身体をしっかり保管しておいてくれ。」

そう言い残してシャンカラは、サマディに入った。呼吸も心臓の鼓動も停止した身体を見て、呆然とする弟子たちを残し、シャンカラは国王の亡骸（なきがら）に入ったのである。

「国王が生き返った！」

葬儀に参列していた王妃と従者は、シャンカラが乗り移ったアマラカ王の復活に、ひっくり返らんばかりに驚いた。中でも、喜んだのは王妃である。王妃は以

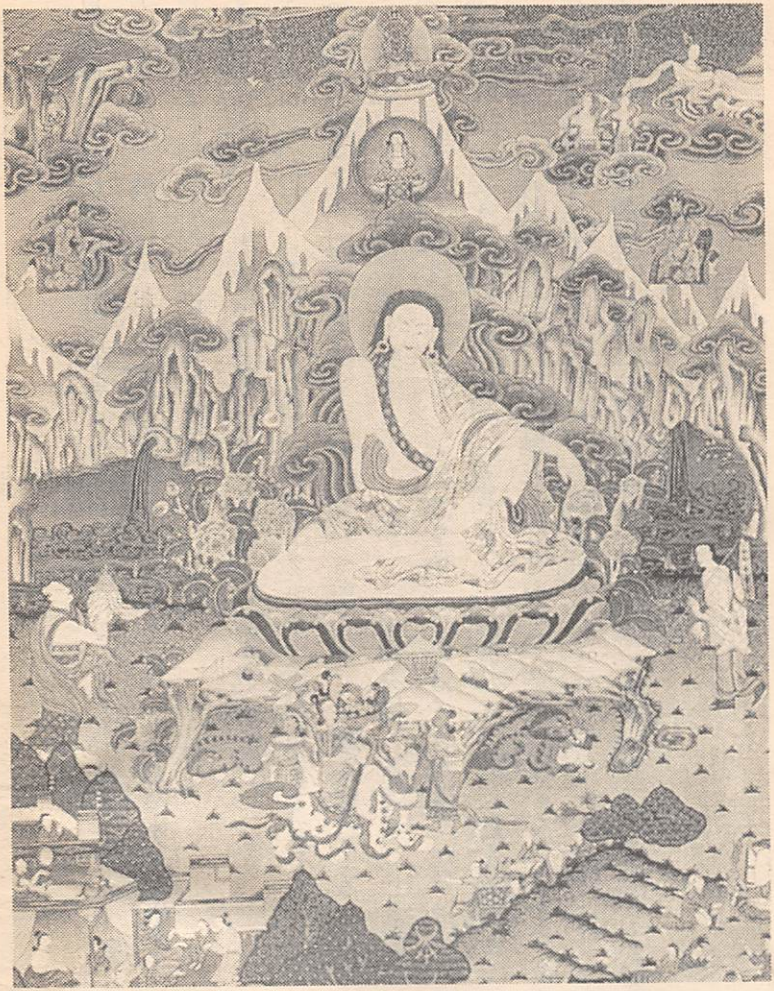
前以上の愛をもって、国王に献身した。

しかし、当初の予定どおり、二週間後にシャンカラは国王の肉体を去り、自らの肉体に戻った。王妃は再び悲しみに陥り、一方、弟子たちは驚きながらも師の復活を手放しで喜び、彼を迎えたそうである。

その後、シャンカラは再び二人の学者を訪れ、二週間の貴重な体験を生かして恋愛問題を見事に解き明かした。さらに、男女の恋愛について長い論文を書いたということである。

◉空中を飛来して——ミラレパのサマディ

次は、舞台をチベットに移そう。十一世紀のチベット密教カギュ派のミラレパ。彼は、今もチベットの民衆に愛されている偉大なる成就者であるが、彼のサマディ伝説も豊富に伝えられている。



チベット仏教の聖者、ミラレパ

ある日、ミラレパが洞窟の中でサマディに入っていると、数人の狩人がそこを通りかかった。彼らは、ミラレパがぴくりともせず座っているのを見て驚き、不審に思って、弓を引きながらこう尋ねたという。

「お前は人間か、それとも幽霊か、もし人間なら答えてみろ。」

しかし、ミラレパは身動きもせず、一言も発せず、座ったままである。

そこで、狩人たちは毒矢をミラレパに向けて射たが、一本も射当てることはできなかった。次に、川に投げ込もうとしたが、その体を持ち上げることすらできなかった。そして、火をつけたが、その体を焼くことはできなかった。ついには、台座ごとミラレパを運び、崖の上から荒れ狂う川の流れへと放り込んだ。ところが、ミラレパは蓮華座のまま、水に触れることなく、空中に浮いているのである。

そして、しばらくすると、ミラレパの体は徐々に上昇し始め、ついには狩人の頭上を越え、元の場所に戻ったのである。もちろん、ミラレパは蓮華座のまま、一言も発することがなかった。

狩人たちは驚き、あわてふためいて立ち去ってしまった。後に彼らは、ミラレパが偉大な聖者であることを知り、ミラレパに信を抱くようになったという……。

◉サマディとは何か？

この他にも、古代ギリシアの英雄、アレキサンダー大王の師であったカルヤーナという人物が、サマディに入って炎の中に自ら身を投じ、命を捨てたエピソード。あるいは、現代では、インドの聖者ヨーゲシヴァラナンダのグルが〝水中サマディ〟を行なった話……。

これらの奇跡はすべて、彼らがサマディに入っていたためになし得たことなのである。

「だから、そのサマディっていったい何なんだ!?」

ここまで読まれたあなたは、しびれをきらしてそうおっしゃるかもしれない。

それでは、である。いったいこの〝サマディ〟とは何だろうか？

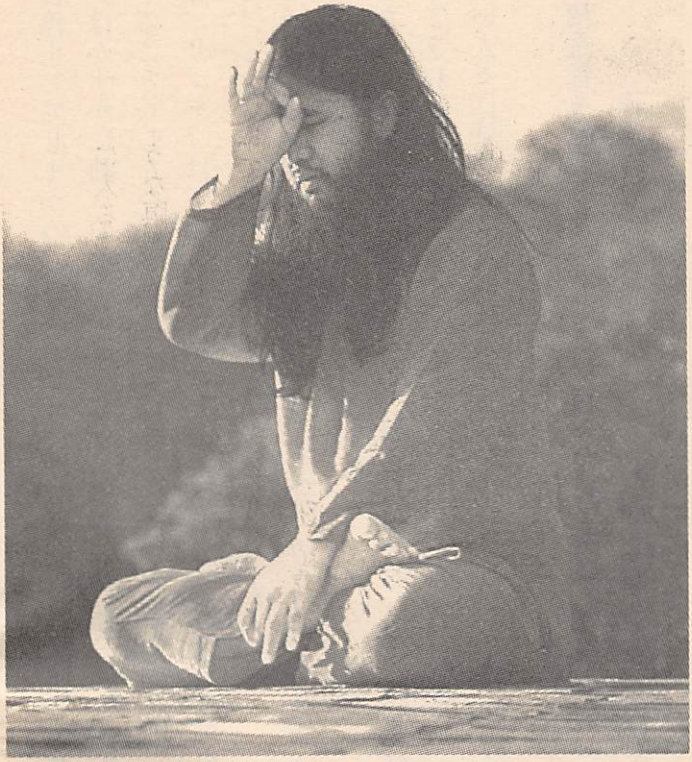
一言で言うなら、瞑想の究極状態ということができよう。正しい瞑想修行をすると、正しいサマディに入ることができるのである。言い換えれば、サマディに入ることのできないような瞑想修行であれば、それはニセモノということになろう。

「うん？　じゃあ、日本ではやっている瞑想教室なんていうのは……。」

そう疑問を抱く方もいるかもしれない。この定義からいくと、日本の瞑想なんてみんなニセモノということになる。瞑想ではないとすると、何だろう？　ただの自律神経安定法とでもいうべきか。

まあ、それはそれとして話を戻そう。この正しいサマディに入ることができた者は、この肉体から意識で成り立つ〝別の身体〟を抜け出させ、様々な世界へ行くことができる。それによって全世界の構造を知り、解脱を果たすことができるのである。

このサマディに入っているとき、肉体的に大きな変化が起こる。何が起こるか？



サマディに入り、そして解脱へと至る。

呼吸が完全に停止してしまうのである。それだけではない。心臓も完全に停止するか、あるいはかすかに動くのみになる。また、食事を取ることも、水を飲むことも、排出することもしない状態となる。つまり、〝死〟と変わらない状態になるのだ。実際、サマディは、サンスクリット語で死を意味するのである。

「あ、そうか！　だから、シャンカラはあんなことができたんだ。」

賢明なあなたは、こう気づくだろう。そう、シャンカラは、まさに〝死〟を体験したのである。

つけ加えるなら、サマディに入ると人間を超えた神秘的な力、神通力が生じる。サキャ神賢やミラレパは、サマディに入ることによって生じた神通力を外道や修行に興味のない人々に見せ、彼らに真実の世界を知らしめようとしたのである。

◉「わたしは預言者を超える者」――キリストのサマディ

「……そのとき、律法学者、パリサイ人のうちある人々がイエスにむかって言っ

た、『先生、わたしたちはあなたから、しるしを見せていただきとうございます。』すると、彼らに答えて言われた、『邪悪で不義な時代は、しるしを求める。しかし、預言者ヨナのしるしのほかには、なんのしるしも与えられないであろう。すなわち、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、地の中にいるであろう。』」（『新約聖書』マタイによる福音書　第一二章三八～四〇）

「何だ、今度はいきなり聖書か？」

とびっくりされたかもしれないが、サキャ神賢、シャンカラなど仏教・ヨーガの聖者だけではなく、実は、あのイエス・キリストもサマディの存在を認めていたことを理解していただくために、聖書の一節をご紹介した。

この文をよく見ていただきたい。地中に三日間とどまることは、一般人には不可能である。それは人間が生命を維持するのに必要な酸素量に対して、地中の酸素がもたないからである。それではどうやったら、それを成し遂げられるか？

そこで、一つの答えが出てくる。呼吸が停止すればいいのである。それならば、酸素の消費は起きない。

現代医学的常識から考えると、呼吸が止まるなどということはあり得ない。しかし、実際にはそれは存在するのである。そう——もうおわかりのとおり、サマディに入れば、呼吸は停止するのだ。

イエス・キリストが、教えを述べ伝える前は激しい苦行もなした修行者であったことは、聖書を読めばわかることである。修行者であった彼は、預言者の条件は、サマディに入ることができる者であると定義したのである。

しかしよく考えてみると、それは、当然のことだといえるだろう。神の意思を受け取り、神の言葉を述べ伝えるのが預言者だとするならば、少なくともサマディに入ることのできるステージでなければ、預言者とはなり得ないのだから。

そして、彼自身は、四十日間の断食によるサマディを行ない、

「見よ、(預言者)ヨナにまさる者がここにいる。」

と、自分自身は預言者を超える者であると宣言しているのである。

◉決死の挑戦！　アンダーグラウンド・サマディ

ところで――。

「三日三晩、地の中にいるであろう。」

まさにこの言葉を彷彿（ほうふつ）とさせる試みが、今、オウム真理教で行なわれようとしている。

地中に一辺三メートル四方の完全密閉の小部屋（チェンバー）を作り、その中でたった一人で五日間、瞑想修行をして過ごそうというのだ。もちろんこの間、食べ物は取らない。飲み物も飲まない。空気の入れ替え、酸素の補給などもしない。明かりはあるが、中は基本的に真っ暗闇である。

屈強な男でも「やれ」と言われれば、真っ青になってしまいそうなこの無謀な試み――これを、「アンダーグラウンド・サマディ」と呼ぶ。

鋭い読者の方はおわかりになったろうが、わざわざ、「アンダーグラウンド・サマディ」という命名がされているのは、もちろんこれが、サマディという存在の証明、それを成し遂げた人々がサマディに入ることのできる修行者であることの証明のためになされるということである。

挑戦するのは、麻原尊師の愛弟子、九名。彼らは皆、最低〝マハー・ムドラー〟の成就をなした修行者である。マハー・ムドラーの詳しい説明は別の機会に譲るが、要するに彼らのステージというものは、小乗の完成であり、仏典でいう供養値魂（阿羅漢）の境地なのである。望むなら、ニルヴァーナ（涅槃）に入れるという高みだ。

つまり、このアンダーグラウンド・サマディは、フツウの人間だった人々が麻原尊師に導かれてサマディに入り、解脱を果たしたということの聖なる証なのである。

◉死と隣合わせ——五日間の断水断食

しかし、まあ、こう言ったところで、

「そんなこと言ったって、もしかしたらフツウ人でも、そのアンダーグラウンド・サマディというのができるんじゃないか？」

などという疑い深い方もいらっしゃるかもしれないので、それが可能かどうかいくつかのデータをもとに少し詳しく検証してみよう。

まず、ここに一つの興味深いデータがある。

皆さんは、天台宗（比叡山）の「千日回峰行」をご存知だろうか？　その名のとおり、比叡山の峰や谷を一夜に三十キロ巡り歩いて、堂塔、野仏、石仏、それに木や草も礼拝する修行だが、この回峰行を七百日満行すると、「堂入り」という荒行が行なわれる。実は、この「堂入り」に、今回のアンダーグラウンド・サマディといくつか似通った点が見られるのである。

修行者はこの行に入ると、明王堂にこもり、九日間、断水断食・不眠・不臥

（※横にならない）で不動明王に祈りを捧げなければならない。ただ、九日間といっても足かけなので、実質的には七日間と十四時間の断食となる。堂の中は暗くローソクが灯されており、身の周りの世話と監視役に二人の僧が仕えている。修行者は、その堂内で終始座って真言を唱え続けなければならないが、一日に一回だけ、仏に供える水をくむために、堂から外に出ることが許される。

「堂入り」の概略はこのようなものだが、まず長期間の断水断食という点がアンダーグラウンド・サマディと似ている。また、不眠という点も似ている。サマディに入っているときは超覚醒状態にあるため、一般には寝ないからである。

違う点もいくつかある。「堂入り」は眠り込んでしまったときなどの監視役がついているが、アンダーグラウンド・サマディは、たった一人きりで自分の意志で瞑想修行を続けなければならないということ。堂の中は常にローソクのほのかな明かりが灯されているが、チェンバー内は基本的に真っ暗闇であるということ。「堂入り」は一日のうち、外に出る機会があるが、サマディ中は外にいっさい出

られないということ。そして、堂内では常に十分な酸素があるが、チェンバー内ではどんどん酸素が減っていってしまうということである（代わりに毒性のある二酸化炭素が増える）。

この比叡山の伝統的な荒行――昭和に入って九人が成功し、明治から数えて二人が死亡したという。落伍者、つまり途中でギブアップした人の数は外部には出ていない。

このデータは、単なる七日間の断水断食だけで、一般的には、生命に非常に危険があるということを如実に示しているといえる。もちろん、今回のアンダーグラウンド・サマディは五日間である。しかし、ある医学的データによると、五日間でも死亡した例があるという。

とにもかくにも、今回の五日間の断水断食だけでも非常に過酷なものであることは間違いないといえよう。

◉あのパイロット・ババの奇跡を超える

その危険な五日間の断水断食に加えて、このアンダーグラウンド・サマディで決定的なのは、密閉されているため、中の酸素がどんどん減っていくということである。なにしろ、内容積はたった二七立方メートルしかないのだ。しかも、サマディの会場となる富士山の麓は、標高一〇〇〇メートルを超える高地で、酸素濃度が標高〇メートルの場合の八七パーセントとかなりのハンデがある。

ここで、少し詳しく今回のサマディで使うチェンバーの構造をご説明しておこう。

今回のチェンバーは、パイロット・ババが数年前に同じ山梨県でアンダーグラウンド・サマディを行なったときのチェンバーをモデルとした。

パイロット・ババとは、インド政府からマハリシ（大聖者）の称号を贈られた有名なヨーギーである。彼は、七年間激しい修行に打ち込み、ヒマラヤでラージャ・ヨーガを修めた後に、「人々の心に宗教心を芽生えさせよ」とのハーリー・ババ

の命を受けて、国内外でサマディ実験を公開し続けることで大衆にヨーガへの興味を持たせようと活躍していた。日本にも何回か来日しているので、名前を聞いた方もいらっしゃるかもしれない。

そのパイロット・ババが、数年前日本でアンダーグラウンド・サマディを行なったときは、勝山村の業者の手で、そのチェンバーが製作された。今回、オウム真理教のスタッフは、まず、ここを訪ねることからチェンバー製作を始めたのである。

チェンバーの大枠には米松を使用。鉄にするか木材にするかで最後まで検討が加えられたが、金属の場合、錆びて酸素を消費する心配があり、また、錆止めのためにペンキ等を使ったとしても有害物質の発生の心配もあるため、臭いもせず加工もしやすい米松が選ばれた。

設計にあたってはきちんとした構造計算がなされ、上から盛られる土圧にも十分に耐えられるよう丁寧な補強を加えられながら設計。仮に許容範囲を越える土

圧が上から加わったとしても、左右前方の壁は崩れない構造にした。なお、チェンバー上部には防水のためにステンレス板が張り巡らされた。

中の構造は、瞑想用のベッドが一・三メートルの高さに用意されており、酸素濃度計がセットされた。また、万が一のときのために、外界と通じるインターホンも一応据えつけられた。

このようにチェンバーは細心の注意を払って作られたわけであるが、先程挙げたパイロット・ババは同じ条件で、五十時間の挑戦にとどめたという。今回のアンダーグラウンド・サマディの厳しさがうかがい知れる。

ちょっと考えてみていただきたい。地中に埋められた真っ暗な箱の中。酸素はどんどんと薄くなっていく。食べ物もない。飲み物もない。一緒にしゃべってくれる人もいない。もちろん、テレビやラジオなどの娯楽物など何もない。そんな中にあなたが入ったとしたら、いったいどうなるだろうか?

フツウの人なら、恐怖でおそらく一日ともたないだろう。いうまでもなく、五

入念に造られたチェンバー。酸素濃度計がすえつけられている。

日を貫徹する人など皆無に違いない。

「フツウの人が、アンダーグラウンド・サマディに成功する可能性」――そんなものは、一パーセントにも満たないのだ。アンダーグラウンド・サマディは、解脱者のみがなし得る真の奇跡なのである。

二、なぜ、呼吸が停止しても生きていられるのか

◉心臓が止まる理由

ところで、である。ここまで読み進められた方の中には、「なぜ呼吸が止まったり、心臓が止まったりするんだ？」などという疑問を持たれた方も多いのではないかと思う。

第二節では、この疑問についてお答えしたい。次に引用する文章は、麻原尊師が最近、仏教経典の研究と自らの経験から、サマディについて詳しく説かれた記事からの抜粋である。

「サマディとは、風エレメントが空エレメントに還元された状態を指す。これは呼吸の停止と同義である。なぜなら、風エレメントが呼吸を司っているので、それが空エレメントに還元されると呼吸が停止するからである。」（オウム真理教雑

誌『えんじょい・はぴねす』十月号「宗教は一つの道」）

まあ、こう説明されても仏教・ヨーガに興味のない人には何が何だかわからないと思うので、少しご説明しよう。

仏教やヨーガでは、わたしたちの肉体は五つの要素で構成されているとする。それは、

①地エレメント（地元素）……筋肉組織・骨・嗅覚
②水エレメント（水元素）……血液・体液・味覚
③火エレメント（火元素）……体温・消化の炎・視覚
④風エレメント（風元素）……人体エネルギー・呼吸・触覚
⑤空エレメント（空元素）……宇宙エネルギー・体腔（たいこう）・聴覚

の五つである。つまり、呼吸を司っている風エレメントがサマディによって空エレメントに還元され、呼吸の停止が起こるというわけなのだ。

さらに、「心臓停止」については、麻原尊師が同じく「宗教は一つの道」で説

明されている。

先程も述べたとおり、心臓の働きは「完全な停止」だけではなく「微拍動」という状態も存在する。現代のインド・ヨーガでは、後者が正統とされているが、なぜこのような二説があるのかについては、経典にも明らかにされていない。しかし、麻原尊師がご自分の体験を検討することによって、その秘密さえもここで明らかにしているのである。

「心臓の拍動とは意識の働きを表わしている。よって、この愛欲界を完全に超えるサマディに入った場合のみ、つまり粗雑な元素でできている心臓から意識が超越したとき心臓が停止するのである。

『神聖網経』において、愛欲界を経験するサマディは、大別して四つに分かれると説かれている。これは正しい。

下から順に説明しよう。

人間の意識レベルをそのままに温存し、その意識の深い状態に入り、現象の整理と検討、熟考によって得るサマディが一番下のサマディであるが、このときの呼吸はほとんど停止しているか、完全に停止している。しかし、心臓は早鐘のように打っているか、ややゆっくり目に打っているかのどちらかである。

また、このとき行なわれた検討・熟考の結果は、呼吸の停止が完全になされている場合のみ、正しいものであるといえる。ただし、それは、大変短い時の流れにおいてである。

それは、人間の意識レベルを抜け出していないからである。この人間の意識というものを考えてみてほしい。例えば、人間の心の変化というものは、とても速い。性欲など低レベルのものなど、その最たるものだろう。その意識の枠組みの中での検討・熟考なのであるから、大変短い時の流れにおいての正しい結果しか得られないのである。そして、精神の集中の長さが人間のレベルを超えたとき、次の段階のサマディへと移行するのである。

次の段階のサマディは下から二番目である。これは、完全なる呼吸停止と、大変静かな心臓の働きを呈するのである。また、このサマディによって得られる体験は、意識が肉体から離れ、意識堕落天へと至るものである。

……（中略）……

下から三番目のサマディは、戯れ堕落天へ至るサマディである。このとき、呼吸は完全に停止し、心臓は遅弱の働きを呈するのである。

……（中略）……

また、この二つの天界は両方とも前述のとおり煩悩を有しているから、心臓の働きは停止しないのである。

第四番目の、すなわち愛欲界の最高のサマディは、神聖天界へと至るサマディである。

この世界は、性欲、食欲をほとんど止滅しているか、あるいは、完全に止滅している魂の行く世界であるから、心臓は微弱拍動なのである。

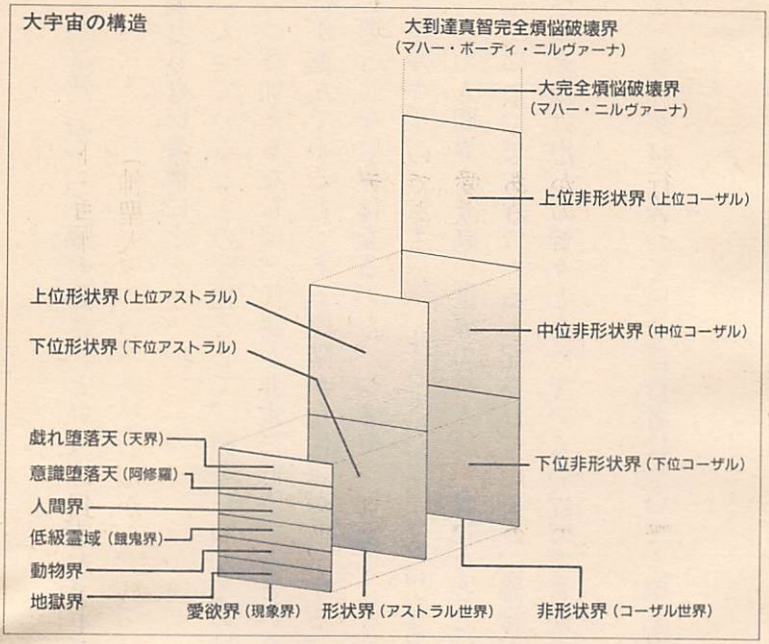
そして、現代のインド・ヨーガの最終地点への到達がアートマン（真我＝自己の本質）とブラフマン（神聖天界）の合一であるから、残っている煩悩もわずかとなり、完全な呼吸の停止と、微弱な拍動というサマディの定義が出てくることはうなずけるのである。

……（中略）……

ここまでが愛欲界のサマディによって得られる結果である。そして、この上に光音天からマハー・ボーディ・ニルヴァーナ（大到達真智完全煩悩破壊界）までのサマディが存在するのである。

これらのサマディは、愛欲界を超越しているから、完全なる呼吸停止と完全なる心臓停止が起きるのである。そのときの心臓停止の仕方は、大きな内的音と同時にロックがかけられたかのようにガクッと止まるのである。」

つまり、サマディは修行者のステージによって、微妙に変わってくるのである。



戯れ堕落天はさらに六つに分かれており、上位形状界には、神聖衆天から超越童子天までの17の世界がある。また、上位非形状界には、空間無辺境、識別無辺境、無所有境、非認知非非認知境の４つの世界がある（詳しくは『タターガタ・アビダンマ　第一誦品』参照）。

そのステージの違いが、「心臓の動き」という点に表わされているのだ。

◉食物を必要としない身体に……

サマディに入っているときの変化として、顕著にわかるのは上の二つだが、もう一つあえてつけ加えるならば、代謝が非常に低下するということが挙げられる。

一般に修行が進んでくると、ある段階から代謝が低下する。煩悩が落ちてくると、食物を必要としない体になるのだ。つまり、〝プラーナ（「宇宙エネルギー」を吸収するエネルギー）〟によって、生きていけるようになるのである。

仏典には、この人間界より高い世界の神々は、食物などという粗雑なものは取らず、プラーナによって生きていると記されているが、修行が進むと、意識はこの人間界レベルを抜け出し、神々となっていくわけであるから、当然といえば当然といえよう。

まとめると、サマディに入っている修行者について、第三者が確かめられる変

化というのは、
①呼吸停止
②心臓停止・あるいは微拍動
③代謝の低下
この三つが主ということになろう。

よって、修行者がサマディに入っているか否かを調べる方法については、①、②の二つに絞られることになる。しかし、②の方法を採用すると、経験的に修行者を危険に追い込むということが判明している。これは、サマディ前後の魂の状態が、大変デリケートなため、粗雑なエネルギー（電気など）に耐えられないためだろう。したがって、①の呼吸停止の有無こそ、サマディに本当に入っているかどうかを測る唯一の方法ということになるのである。

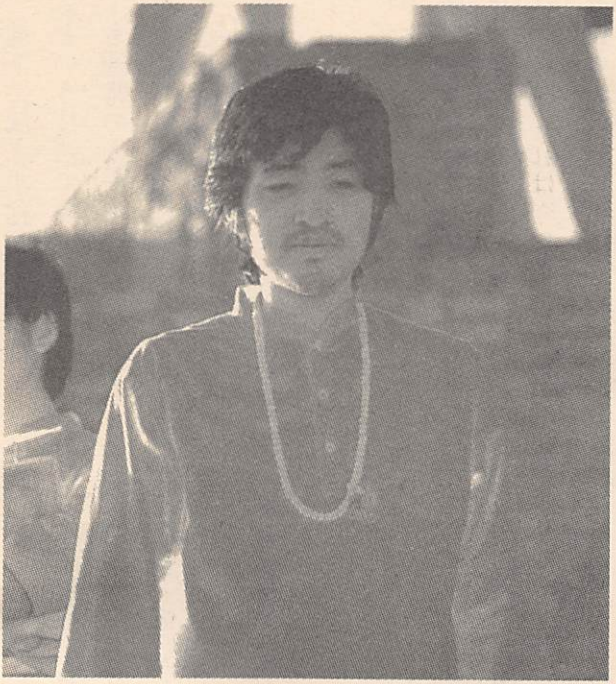
三、運命の日

◉生死をかけて

この呼吸停止の有無が測られるアンダーグラウンド・サマディ――。生死をかけたこの偉業に、まず、トップをきって挑戦したのは、聖者マイトレーヤ智徳成就者（当時マイトレーヤ正悟師）であった。

智徳成就者が、アンダーグラウンド・サマディに挑戦することに決まったのは、九一年九月二十三日の「大説法祭」でのこと。それは、尊師のこの一言で決定された。

「……このマイトレーヤ正悟師のシャクティーパットの前、十一月十二日から、約四日間から五日間、これは今日わたしが心の中で決めたことですが、彼にアンダーグラウンド・サマディをやらせたいと考えています。これはインドでよく行



聖者マイトレーヤ智徳成就者
元宇宙開発事業団勤務。エリートコースよりも修行の道を選び、1987年にクンダリニー・ヨーガ、89年にマハー・ムドラーを成就。優れた思索力には定評がある。

なわれている、地下に飲まず食わず、四日、五日間こもると。そして、三昧（サマディ）に入るという技法です。もうすでに彼の代謝はかなり落ちていて、一日の消費カロリーも通常の人のだいたい三分の一とか、四分の一のレベルに落ちています。これを皮切りに一気に彼のステージの証明をなし、そして十二月十五日からのシャクティーパット・ツアーを始めたいと思います。」

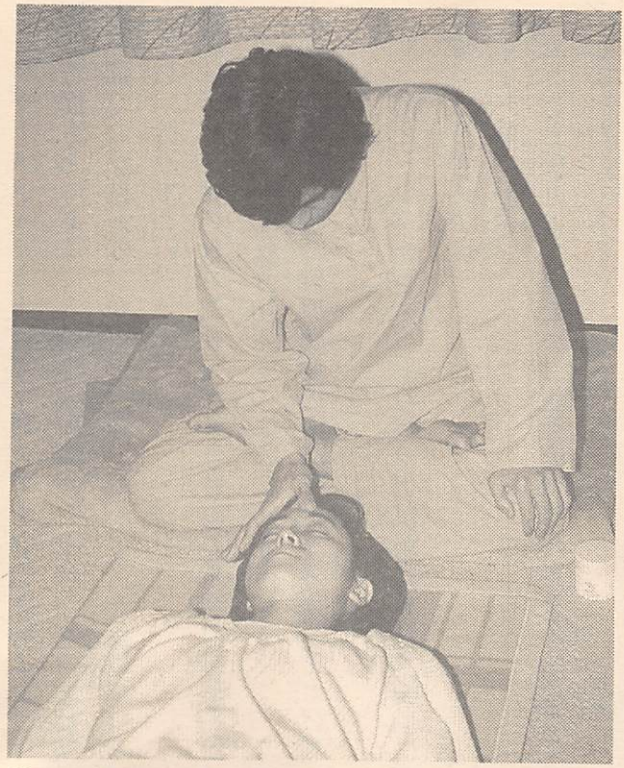
この尊師の言葉を受けて、ついに九一年十一月、世紀の挑戦となったわけである。

◉ついに開始！

サマディ会場となった富士山麓のオウム真理教上九一色村道場。

十一月十二日、午前十一時三十分。この日のために一カ月半にもおよぶ極厳修行に専念していた聖者マイトレーヤ智徳成就者が姿を現わした。

サマディの準備の最後の仕上げともいうべき、イニシエーション（秘儀伝授、



◎シャクティーパット

霊的指導者であるグルが弟子に対して奥儀を教え、さらに、霊的エネルギーの移入をし、霊的経験を授ける、イニシエーションの中でも最高の部類に入るもの。解脱者が相手の体に直接触れ、高次元のエネルギーを移入するのだが、反面、解脱者にとっては相手のけがれたカルマを背負うことになり、肉体的にも精神的にも激しいダメージを受ける。

オウム真理教では、マハー・ムドラーを成就した後、他の魂を利する大乗の修行に入るため、このシャクティーパットが加行として課せられる。

エンパワーメント＝エネルギー移入）を麻原尊師より受ける智徳成就者。やや緊張した面もちである。うつむき加減の口元が「はい」と返事をしているように何度も動くのが見える。サマディのアドバイスを受けているのだろう。

「よし、行ってこい！」

麻原尊師が、深く力のこもった声で最後の激励の言葉をかけた。

まるで報道陣を振り切るかのように小走りにチェンバーに向うと、さっと中に入った智徳成就者。麻原尊師の直弟子数十名が、それに続いてチェンバーに向かう。

ガッタン……。チェンバーのハッチが閉じられ、簡単に開かないためにすぐさま厚く土が盛られた。

――一瞬の静寂。

もうあと戻りはできない。生死をかけたアンダーグラウンド・サマディは始まってしまったのである。

麻原尊師より、最後のイニシエーションを受けて……。

第二章　一番目の奇跡

聖者マイトレーヤ智徳成就者

◉その一瞬

「果たして、彼は本当に生きて出てくるのだろうか？」
人々は、固唾を飲んで〝その一瞬〟を待っていた。

――あれから五日間。チェンバーが埋められている地面の上にいると、地下で瞑想を続ける修行者がいることなど忘れさせるほど静かな日々が流れていき……そして、この日を迎えた。

白い雪を頂いた富士山が、秋の青空に浮かび上がりひときわ美しい。上九一色村道場では、オウム真理教信徒、直弟子、そしてマスコミ関係者など計六百人もの人で埋め尽くされている。

刻一刻とその時は近づく。午前十一時三十分、麻原彰晃尊師が姿を現わされると、静かな空気を破って拍手の渦が巻き起こった。壇上に上がられた尊師の声が、澄んだ空間に響きわたる。

「それではこれから、正味五日、偉大なアンダーグラウンド・サマディをなしたマイトレーヤ正悟師の土払いの儀式を行ないたいと思います。」

尊師の一声に反応し、弟子たちが白いスコップを手に取り、土払いのために一直線にチェンバーに向かった。かなり厚く土が盛られているため、なかなか払い除けられないもどかしさを感じながら、いやが応でも緊張は高まっていく。

「ハッチが見えた！」

声には出さないが、一瞬手が止まる。

……ゆっくりと時間をかけて慎重に上げられるハッチ。太陽の透明光が、その隙間を縫って暗闇の空間に差し込んだ。

中に視線を落とすと――蓮華座を組みながら、瞑想を続ける聖者マイトレーヤ智徳成就者の姿が見える！

――悠然と上を見上げた智徳成就者。周囲の興奮、喧騒などまるで別の世界のようだ。その静かな姿は、まさに〝聖者〟と呼ぶにふさわしいものだった。

◉成功！

愛弟子を迎えに麻原尊師自らがチェンバーの中に入られる。成功に導いてくれた偉大なるグル※に、身振り手振りを交えながら、この五日間の報告をされる智徳成就者。

三十分ぐらい経っただろうか、麻原尊師からやや遅れて、ワイン・レッドのクルタに身を包んだ聖者マイトレーヤ智徳成就者がチェンバーに掛けられたはしごをゆっくりと上がってきた。

五日間の断水断食のせいか頬（ほお）の肉が若干落ちてはいるものの、その足取りは我々と何ら変わりない、しっかりとしたものである。その顔は、穏やかで優しく威厳さえ漂っていた。

――正午ジャスト。

ここに五日間の決死のアンダーグラウンド・サマディは、見事な成功を果たしたのである。

※宗教上、修行上の指導者。

チェンバーから出る聖者マイトレーヤ智徳成就者。ここに、解脱者の証明がなされた。

◉激闘の五日間を振り返って

解脱者の証明、サマディの証明をなした聖者マイトレーヤ智徳成就者。激闘の五日間を振り返ってこう語った。

――地中に埋められたチェンバーは、どんな感じでしたか？

（聖者マイトレーヤ智徳成就者） チェンバーの中というのは、人間が死んだ後の次の転生までの中間状態、バルドーに似ているんですね。つまり、何もできないわけです。例えば、愛する者に会えない、食べ物もない、権力や地位もない、こういう人間が愛着しているものがいっさいないわけです。

しかも、それどころではなく、あの中は真っ暗で何も見えず何も聞こえませんので、肉体と感覚を失ったバルドーの状態にすごく似ているんですよ。実際のバルドーはそういう状態からヴィジョンが出てきて、それに飛び込んだ瞬間、転生先が決まるわけですが、転生を失敗しないためにも、死ぬ前にだれでも一度はそ

のような極限状態を体験し、バルドーの模擬体験をされたらいいと思います。

◉サマディに入れなかった理由

――一日目は、なかなかサマディに入れなかったということなんですが、やはり周りの人の想念というのが気になったんですか？

（智徳成就者）自分では最初、原因がわかりませんでした。あれだけエネルギーを貯めた状態だと普段ならフッとサマディに入れるんですが、緊張が取れずにイライラしているんですよ。何かエネルギーがぶつかり合っているような、そんな状態でした。やはり上にいた人たちの波動を受けていたんでしょうね。

サマディというのは「静慮（じょうりょ）」といわれるように、心が思索に深く集中し、その結果煩悩が崩壊して、静かな状態になって内側の喜びというか喜楽が生じて特殊な状態に入るんですよ。結局、酸素消費データからも明らかですが、その方たちが移動するまでなかなかサマディに入れなかったようです。

――そういうことに対する焦りはありませんでしたか？

（智徳成就者） 焦りというわけではありませんが、いつもどおりではないのでちょっとまずいなという気持ちはありました。ただ、サマディの前のディアーナ（瞑想状態）には入り、意識がアストラル世界に飛んでいたこともありましたので、ずっとまずいなと考え続けていたわけではありません。

そのうち、麻原尊師のご配慮により、上にいた方にも移動していただいて、二日目以降は確実にあちらの世界に意識がいくようになりました。

◉すべては心が作り出した幻影

――チェンバーの中では、特に身体の変化はありませんでしたか？

（智徳成就者） 三日を過ぎたあたりで、ちょっと息苦しさを感じました。そこで初めてインターフォンで酸素濃度を確認したわけです。それ以前にストーブの件で、ベッドの下に入れても測定に影響はないかを確認していましたけど、測定値

を確認したのはこのときが初めてでした。

――それまでデータについては全く気にならなかったのですか？

（智徳成就者） 正直いって、それまで測定値について聞こうか聞くまいか迷ったことがありました。いらぬ情報に振り回されたくないというのがありましたからね。ただ、このときは自分自身で息苦しさを感じていましたから、数字を聞いて心が影響されて身体に変化が生じるのはまずいが、すでに変化を感じているなら聞いた方がいいだろうと思って連絡を取りました。

そのときのデータは確か一九・六パーセントという数字でした。しかも、前日から〇・二パーセントしか落ちていないということで、安心したらしばらくして息苦しさも消えてしまいました。

今から思うと、三日目ぐらいになって、そろそろ終わるなと思って気がゆるんだんでしょうね。それで肉体に意識が集中し、肉体への執着というものが増大したんだと思うんですよ。もちろん、肉体は疲労しているから呼吸がちょっとしづ

らくて、それが息苦しさにつながったのだと思います。いずれにせよ、今回のサマディで麻原尊師の教えどおり、すべて心の作用だというのがよくわかりました。

◉胃があるから苦しい？

――チェンバーが開いた瞬間の気持ちはどうでしたか？

（智徳成就者） 最後は普通の瞑想状態だったので、土を除いているのはわかっていました。ただ、始まりが早かった分、予定よりも早くハッチが開いたので、何の感動もなく終わってしまいました。

実は、この日の五時くらいからどうにもイライラして、また深いサマディに入れなくなってしまったんですよ。後でわかったことですが、会場に信徒さんが来ていてその方たちの想念を受けたみたいで、最後は浅いサマディか、瞑想状態でした。

――五日間の断水断食を終えられて、麻原尊師よりイニシエーションのハチミツ

湯をいただいていましたが、それを口に入れられたときの感想は？

（智徳成就者）五日間の断水断食の直前も三日間断食していて、その前の三週間も一日一回、ほんのわずかな量しか取っていなかったんですよ。それで胃がなくなってしまったような、食欲がない状態でしたから、消化するのがきつかったですね。

正直言って、これは胃があるから苦痛があるんだと思いました。天界というか、神々は要するに胃がなくて、プラーナを肌から吸収してそれで十分ですよね。やはりあちらの世界の方がいいのではないかというように実感させられました。

◉三つの証明

――最後に、今回のアンダーグラウンド・サマディを終えられた感想を一言。

（智徳成就者）今回のアンダーグラウンド・サマディの目的は三つあったと思います。一つ目は解脱の証明。解脱というのはすべてサマディから生じる。それは

サキャ神賢の教えでも正サマディから正精通があって、正離解脱がある。そして、『ヨーガ・スートラ』というヨーガの根本経典にもサマディをもってエンライトメント（解脱）とするという記述があるように、サマディができるかどうかというのは、オウム真理教の成就者というのが、本当に解脱しているのかしていないのかの証明に他ならない。その証明が今回できたと考えています。

そして二つ目、これは愛欲界が存在するんだという証明。これはもちろん、愛欲界を本当に認知するためには皆さんの修行の進歩を待たなくてはなりません。しかし、その前に麻原尊師が繰り返し説法で言われているとおり、実際に見る前に人間界にその愛欲界の投影、これを見ることができる。

地獄界の投影として、病で痛みが止まらない人、餓鬼界の投影として、病で食べたいものが食べられない人、そういう人が存在している。それはその人間、今人間である魂が、その次の世界で地獄や餓鬼の世界に転生するということを示している。

では、今度は高い世界があるのか。高い世界の特徴を見てみると、天界の住人はプラーナを食べ、食物という物質を取らない。天界の住人は呼吸を一日一回しかしない。そういうのが人間界に投影されているのか。もし高い世界から生まれ変わってきた魂がいて、または高い世界に生まれ変わる魂があるとしたならば、そういう人たちは天界の住人と同じように食を断ち、そして呼吸を断つことができるはずである。今回サマディでそれがなされ、よって愛欲界はあるんだという一種の証明がなされたと思います。

そして三つ目、仏教、真理の根本的な教義、これはすべて心の現われであるということです。

心の現われによってこの愛欲界は形成される。仏教の教義というのはすべて心、これがすべてを決定しているんだとされています。それは本当なのか。心がどうなろうと人間が生きるためには呼吸が必要である。心がどうなろうと人間が生きるためには食が必要だと現代の人たちは言うでしょう。しかし、サマディによっ

て心が統御されれば呼吸はいらない。食はいらない。よって、すべては心の現われであるという証明の一つができたのではないかと思っています。

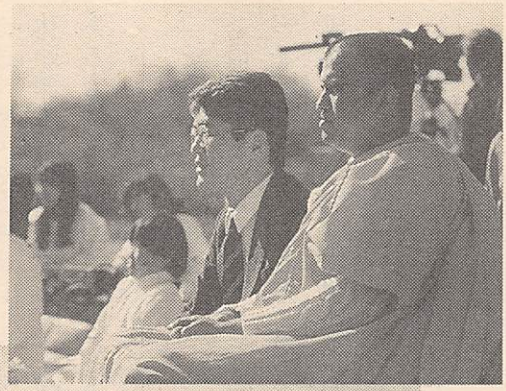
今回のアンダーグラウンド・サマディによって、この三つが証明されたと思っています。

終始、笑顔でインタビューに答えられた聖者マイトレーヤ智徳成就者。記念すべきサマディの証明の第一歩はこうして記されたわけである。

◉至福の境地

ところで、サマディに入った聖者が数々の神通力を発揮したように、聖者マイトレーヤ智徳成就者も、このチェンバーの中でいくつかの神秘的な力を経験している。

人の心を読む他心通（たしんつう）、過去世を知る宿命通（しゅくみょうつう）……。智徳成就者は、もともとこれ



◎マスコミ、海外からも注目

今回のアンダーグラウンド・サマディには、マスコミ関係者も強い関心を抱いていたようで、ＮＨＫ、日本テレビ等のテレビ局、さらには『週刊ＳＰＡ！』など週刊誌も熱心に取材を行なっていた（写真下）。

また、海外からは、南スリランカ福祉協会の会長であるグナロカ会長も来訪された（写真上）。今もなおサキャ神賢の教えを忠実に受け継ぐテーラヴァーダの国、スリランカ。そのスリランカでも高い地位にある出家修行者、グナロカ会長は、今回の成功に際し、「やはりきちんとした修行をされている方だからできる、素晴らしいことだと思います。普通の人では絶対にできるものではありません」と語った。

らの神通力を持ってはいたが、それがさらに磨かれたようだ。

「どんな体験？」

と興味津々で、聞かれる方もきっといらっしゃるだろう。が、しかし、今回はそこまで書くのはやめにしたいと思っている。これ以降のサマディの挑戦者たちの体験談で、神通力のことは詳しくご紹介したいと思っているので、それに興味のある方は次に進んでいただきたい。

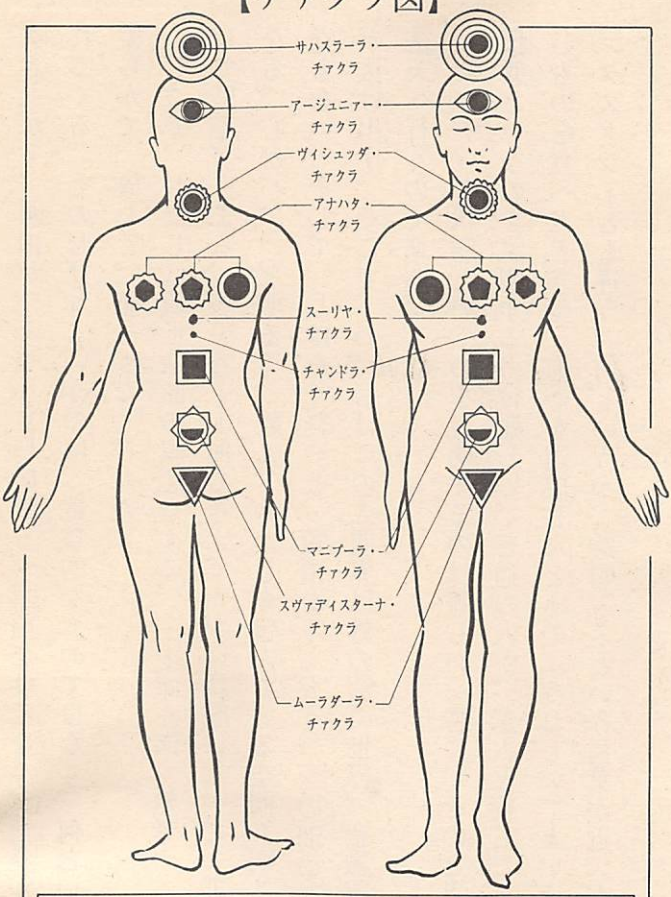
――まあ、しかし、こんなことを言うと、

「それは、ズルイ！」

と憤る方もいらっしゃると思うので、最後に一つ、神通の体験ではないが、サマディに入っているとき内側でどのような世界が展開されているかを描写した智徳成就者の興味深い体験談をご紹介しよう。

「……瞑想に入ると、クンダリニーのエネルギーがムーラダーラ・チャクラから

【チャクラ図】



—チャクラ—

チャクラとは、人間の身体にある霊的なセンターで、主なものは七種である。しかし、普通の人はそれが眠った状態で働いていない。霊的エネルギー、クンダリニーが覚醒すると、そのエネルギーをもってチャクラが開いていくのである。また、チャクラは、身体の下部に位置するものに比べ、上部へいくほど次元が高くなっていく。

吹き上がり、頭頂がひんやりとしびれる。頭頂だけでなく、全身がどんどんしびれてくる。そのしびれというのは、電撃的なものではなく、何というか、とても柔らかで、優しく、細やかなしびれだ。

そこで、わたしは現世捨断の瞑想をする。……深く深く熟考すると、ほどなくして思考が止まる。無思考——何も考えていない状態に入って、非常に心地良くなる。心がパアッと明るく、軽く、わたしを包んでいる空間も明るい。肉体の感覚もない。そして、しばらく経つと、頭頂から〝もう一つの別のわたし〟、化身が抜け出す。そこで、わたしはこの人間界以外の別の世界、意識堕落天や戯れ堕落天へ行くのである。

サマディの状態というのを説明するのは難しい。特に、そのときの自分の心の状態というのを説明するのは難しい。普通の人が、恋人と接したときや、おいしいものを食べたときや、何かを達成したときの『うれしい』という感情とは違う。エクスタシーとも違う。何というか、透明……という言葉が近いだろうか。いろ

いろな欲求を熟考することによって切っていくから、心の中に何もなく、いかなる思考にも煩わされない、解放された、何もしなくても軽くて明るい状態なのである。

おそらく、このときに自分を包んでいる明るい光は、自己の内側から発される光なのだろう。真っ暗な中で瞑想していても、光の世界にいるのだから。

化身が自分の肉体に戻り、肉体の感覚が復活すると、自分が呼吸をしていないのがわかる。それまで呼吸をしていなかったのだ。体は相変わらず心地良くしびれていて、頭は晴れわたったようにスカッとしていた。」

◉連続アンダーグラウンド・サマディ開始！

「――なんだか余計、神通力の体験が知りたくなった。」

それでもこう考えてしまう方は、どうか『ザ・サマディPARTⅡ――実録：アンダーグラウンド・サマディ一九九一』（オウム出版）を参照していただきた

い。このときの聖者マイトレーヤ智徳成就者のサマディ体験を詳しく記した貴重な一冊である。

聖者マイトレーヤ智徳成就者のアンダーグラウンド・サマディから、約一カ月後、次は聖者ヤソーダラー最上善逝（当時ヤソーダラー正大師）以下七名の高弟たちのサマディが連続して行なわれることとなった。

聖者マイトレーヤ智徳成就者よりさらに修行ステージが高く、マハー・ムドラーの次のヨーガである大乗のヨーガを成就されている聖者ヤソーダラー最上善逝。当然、サマディの体験も豊富である。

すると、

「じゃあ、楽々、クリアね。」

と思われるかもしれないが、実は、このアンダーグラウンド・サマディ、ある意味では聖者マイトレーヤ智徳成就者よりも危険な試みだったのである。

そびえ立つ霊峰・富士。この麓で、〝連続アンダーグラウンド・サマディ〟が行なわれるのだ。

なぜか？

――その秘密は、次章で明らかにすることにしよう。

第三章　〝死生智〟で来世を知る

聖者ヤソーダラー最上善逝

◉危険な理由は……

「修行ステージが高ければ、それだけ楽にできるんじゃないの？　何で危険なの？」

この疑問にお答えするには、少し長い説明が必要だろう。

〝マハー・ムドラー〟を成就した者は、次の大乗のヨーガの成就へと向かう。先程も少し触れたが、このマハー・ムドラーの成就者は、仏典でいう阿羅漢の境地に達した者であり、ニルヴァーナに至れる者であり、他からの干渉がない限りいつでも安定した幸福な状態にいることができるのである。

「わたしだっていつも安定しているし、幸せよ。」

などと思う方もいらっしゃるかもしれないが、ここでいう安定とか幸せというのは、「おいしいものを食べて、ああ幸せ」とか、「恋人と会ってうれしいの」というのとは根本的に違う。

それは、聖者マイトレーヤ智徳成就者のサマディ体験にあったように、外的に

聖者ヤソーダラー最上善逝
麻原尊師の弟子であり、妻でもある。1988年本格的な修行に入り、わずか一年あまりでクンダリニー・ヨーガ、マハー・ムドラーを成就する。多くの人々にシャクティーパットを施し、91年には、大乗のヨーガを成就。

何も与えられなくても、何かと接触しなくても、ただそこにいるだけで幸福な満ち足りた境地なのである。

聖者ヤソーダラー最上善逝のサマディ体験にもそれがよく表われている。マハー・ムドラー成就後、まだ大乗のヨーガの修行に入る前の最上善逝のサマディ体験を少しご紹介したい。

◉自己の発する光に包まれて——究境の〝空〟の境地

「極厳修行が始まって二日後、アストラル世界の体験を打ち消したわたしは、究竟(きゅうきょう)の瞑想中に意識を空間に固定することを覚えました。青い空間があったので、そこに入ってみたのです。その瞬間、意識はその空間いっぱいに広がりました。実は、究竟の瞑想時に、アストラルで数時間後の未来に起こる出来事を見続けるという特殊な意識状態になったのですが、不思議と「この未来ヴィジョンも消さなければならない」という気がして払いのけたのです。そのときから今回の新た

なる体験が始まりました。

雑念は全くなく、深く入って集中し続けることができました。意識が空間いっぱいに広がったまま集中できるというのは、体験してみないとわからないことでしょう。ただ、不思議なことに、意識は同時に現実レベルにもあるのでした。つまり、深く集中しながら、現実をも冷静に把握しているのです。

尊師が、

『それは、八勝境（八つの克服境）の中の第五勝境の段階だ。』

と教えてくださいました。

間もなく、この現象界のすべてがパーッと輝く黄色一色に染まるようになりました。目の前のプリントも畳もすべてが黄色なのです。あまりに美しく輝いているので修行場にいることを忘れてしまっていたほどです。次にその黄色はとても鮮やかな黄緑、そして青緑へと変わってゆきました。これは形状界に入っている状態だそうで、何日間も続きました。

同じころ、詞章やプリントが透けて宇宙が見えてきました。これは天眼（※神通力の一つ）を使って見ているのだそうです。また、自分の内側から発されている光がプリントに射し込むこともありました。自分自身が光っているのだということをはっきりと認識したのはこのときです。

さらに五日経ったときには、

『もう少ししたら魂の究竟を体験するかもしれないな。』

と尊師がおっしゃってくださいました。当時の日記をそのまま抜き出すことにします。自分では経験が乏しく、自己の状態を分析できるほどではありませんから。

●九〇年七月十九日

――意識を深めていったらコーザルの光があったので、その中に意識を固定した。これも、意識を空間いっぱいに広げたまま集中している状態だ。しかし、本当はもっと明るい空間があるのだと思う。ここには白い光と小さな赤色などの光の粒

子が存在している。究竟の瞑想全体で一時間二十分だったので、おそらく一時間くらい経ったときのことだと思う。急にヴィジョンを見出した。息苦しくなり、早い鼓動が。その後は、周囲がうるさく、深い意識状態へと持っていけなかったので、浅いところに意識を置いたまま。

『三昧（サマディ）に入って瞑想に入っていないから外の音で動いてしまう。』と尊師より注意あり。

現実でも（瞑想しなくても）光に包まれて至福の状態を味わう。尊師に『喜・軽安・楽のどれだ？』と聞かれたわたしは、『楽』と答える。このとき意識ははっきりしているし、体も固定されている（客観的に見ても体が動かないというのは、一緒に修行していた師が教えてくださいました）。

●七月二十日

五十分から一時間くらい深くそこ（光の中）に固定（コーザル世界はまさに

〝止まっている〟という感じ。現象界での時間は後で計算したものです）。周囲の音も遠くに聞こえ、心に響かない。ゆっくりと意識を戻した。途端に足が痛くなる。もう一度入らなければもたないな、と思って入ろうとするがなかなか入れず、手ごろなところにあったオレンジ色の光の中に飛び込んだ。しかし、そこでは竹刀がバシッバシッと畳を叩く音（究竟の瞑想中に寝込んでしまう人を起こしているのです）にビクッとする。尊師に、

「そんなところに入ったら、これまでの修行が台なしになるぞ。」

と叱られる。尊師はコーザルの光の色の意味を知り尽くしておられるんだな、とつくづく思った。また、今のわたしは、完全に善性のエネルギー状態になっているとのこと。

●七月二十一日

意識を固定する場所を探した。アナハタ・チャクラから光が射して辺りを照ら

している。漏れ出ている光をたどって、アナハタ・チャクラに入った。白い光の世界である。三十分ほどそこにとどまる。でも、あまりいいところじゃないなという印象。意識を現実に戻してから、もう一度光の空間に入った。次に戻ったとき、ふと、自分から入る世界を探すのではなくて、世界を近づけようと思った。すると光の世界が一面に広がり、意識も体もなくなってただ漂った（ただし、それを認識している別の意識が存在している）。

――このようにわたしは、空（コーザル世界）にとどまる体験を多くしたのでした。この修行が寂静に到達することを目的としていたのですから、当然と言えば当然なのですが、尊師なくしてはこのステージに到達することなどとてもできなかったことでしょう。

空の境地は、とても言葉では表現できません。煩悩がなく、いっさいの雑念がなく、意識は鮮明で集中し続けている、心は満ち足りて幸福の中に安住している、

自分の発する光に包まれている（尊師にも「完全に解脱者の光になってきたな」と評されたものです）――この終極にマハー・ニルヴァーナが存在しているのだということに、もはや疑いはありません。」

◉自己の幸福を捨てて他のために

このような素晴らしい状態、これがマハー・ムドラーの成就者の境地なのである。

このマハー・ムドラーの次のステージ、大乗のヨーガとは、この素晴らしい自己の安定、幸福、歓喜を捨てて、他の魂のためにひたすら尽くす修行である。オウム真理教では、この大乗のヨーガに入るためにシャクティーパットという加行（かぎょう）が課せられる。

シャクティーパット――それは、前にも少し説明したが、与えられる者にとっては神聖なるエネルギーを受けられる最高のイニシエーションであるが、与える

側にとっては相手のけがれたエネルギーを受ける苦痛の激しい修行である。相手から移ってきたカルマは、身体を通るエネルギー管、〝ナーディー〟を詰まらせ、それまでせっかく修行によって培ってきた自己のステージが、著しく落ちてしまう。

今まで簡単にサマディに入ることができたのに、急に入れなくなる。煩悩がなかったのに、煩悩がわき起こってくる。美しい光の世界にいたのに、低級霊域の世界へ導かれる――。

しかし、それでもシャクティーパットを施す修行者は、その魂が高い世界へ導かれることを願う慈愛ゆえに、シャクティーパットをなすわけである。それが利他の修行、大乗の修行なのだ。

聖者ヤソーダラー最上善逝は、マハー・ムドラー成就後、このシャクティーパットを実に、一六四八名に対してなした。そして、たくさんのけがれたカルマを受け、それまでの心の安定を崩した。

今回の聖者ヤソーダラー最上善逝のアンダーグラウンド・サマディが、なぜ、マイトレーヤ智徳成就者のアンダーグラウンド・サマディより危険である可能性があると言ったのか——これでおわかりだろう。

入る前に若干の集中的な瞑想修行はなしたとはいえ、受けたカルマをすべて落とし切ることもなく、聖者ヤソーダラー最上善逝は、過酷なアンダーグラウンド・サマディに挑戦することになったのである……。

◉奇跡的な宗教

十二月五日、少し肌寒さを感じるこの日、聖者ヤソーダラー最上善逝は、上九一色村道場の地下のチェンバーに入られた。聖者マイトレーヤ智徳成就者が入られたのと同じチェンバーである。

その直後のこと。麻原尊師が会場に集まった弟子たちに向けて、「なぜ 連続アンダーグラウンド・サマディを行なうことになったのか」について説法をされた。

今回のヤソーダラー正大師のアンダーグラウンド・サマディの試みは、前回のマイトレーヤ正悟師のアンダーグラウンド・サマディの試みとまた違った意味での重要性を秘めている。

それは、彼女がシャクティーパットという加行を終えて、ま、約三カ月から四カ月経つわけだが、その間に、どの程度風の働きを回復しているかということが一つの見どころとなる。

まあ、もともと彼女は普通の生活をしながらも四日間の断水断食を平気でこなす人だから、この中での五日間の断水断食については全く問題ないと思われる。しかし、呼吸については、これはマイトレーヤ正悟師もこれから経験する部分に入るわけだが、エンパワーメントによって管が詰まり、それによって呼吸が働き出すと。つまり、内側の風の働きが制御されることによって外側の風が働き出す。で、彼女が入る前の状態を見ていると、まだ若干の呼吸というものが生じていたから、この五日間の間にどこまでそれを止め、そして、安全圏内で逃げ込むかと

いうことが一つのポイントになってくるのではないかと考えている。

ではなぜ、前回のマイトレーヤ正悟師に続いて今回ヤソーダラー正大師から始まる正大師・正悟師のアンダーグラウンドの五日のサマディを行なうことになったのかということについて、君たちに少し説明したいと思う。

もともと二十一世紀に登場する宗教、二十世紀の終わりから二十一世紀に登場する宗教は、奇跡的な宗教であるというふうに予言書に述べられている。しかし、わたしたちがこの地球上のいかなる所を見渡したとしても、その奇跡的な宗教は存在していない。いや、言い方を換えるならば、それはこのオウム真理教以外存在していないということができる。

では、オウム真理教はまず何からスタートしたのかと。これはみんなもよく知ってのとおり、ダルドリー・シッディ（※空中浮揚の前段階）からである。次に、わたしの予言ではアンダーグラウンド・サマディ、そして水中サマディへと移行する。そしてやっとまあ一応、社会的な位置づけとして、オウム真理教の神秘性、

宗教性というものが認められ――まあ、それだからこそ、なおかつ逆にオウム真理教は叩かれるわけだが――オウム真理教が本来の宗教活動に戻ったということができる。

◉天へ帰り、天を超え

ではわたしは、これからどのようなことを考えているのかと。それは、例えば、アンダーグラウンド・サマディの五日、これはある段階がくると師（※クンダリニー・ヨーガの成就者）でもできる段階に入るのではないかと考えている。それはどういうことかと。

人間を制約しているものの考え方は観念である。よって、例えば一番目にマイトレーヤ正悟師がアンダーグラウンド・サマディを成功させたことは、大変貴重な意義がある。つまり君たちの先達であるマイトレーヤが、それを成功したと。で、これに続いて、シャクティーパットを行なった後のヤソーダラー、あるいは、

まだシャクティーパット前のマンジュシュリーやミラレパたちがどんどん成功することによって、君たちの中に、オウム真理教の修行を確実にこなしていけば、少なくとも、五日間のアンダーグラウンド・サマディに入ることができるんだという確証が得られるはずである。

そして、この五日を最終的には三十日から六十日間に引き上げたいと考えている。というのは、このアンダーグラウンド・サマディが、三十日をもし越すことができるならば、それは現代のヨーガでいわれている限界点を超したサマディということになるからである。そして何を隠そう、サキャ神賢は、三年間の断食をなさったといわれている。

最終的にわたしが考えている部分は、君たちの観念を一つずつ取り払い、そして、一カ月、二カ月と平然と断水断食、あるいは断食を二カ月三カ月と行なったとしても平然と耐えられると。耐えられるというよりも、そういうものでは生きていかない、つまりプラーナによって生きていく生命体へと作り変えたいと考え

ているからである。もちろん、そのとき君たちは神聖天界の住人になっていることは間違いない。それをこの地上に達成すること、これがねらいなのである。そして、そのような形で、完全に代謝が落ちきった状態では呼吸はゼロの状態になる。この段階で、水中サマディは成功するのである。

では、次にである。この段階で水中サマディが成功するということは、何を意味しているのかと。これは、第四静慮を意味している。つまり、入出息が完全に静止した状態を意味している。そして、この入出息が完全に静止した状態のとき、わたしたちは化身を作り出し、その化身によって粗雑な身体を作り出すことができる。その化身が形成する粗雑な身体、その身体というのは、まさに自在な身体、テレポーテーション、浮揚、その他が自在な身体ということになるのである。

つまり、奇跡の段階的証明、そして証明と同時に君たちの観念の崩壊、そして人を超えさせて神とさせると。これがわたしの君たちに与える愛なのである。

ということは、この二番目のヤソーダラー正大師のアンダーグラウンド・サマ

ディは当然失敗させられないし、三番目、四番目と続く正悟師のアンダーグラウンド・サマディは、失敗させられない。それと同時に、師、あるいはスワミ、サマナといった者たちが、これからこの課題を目標として励み、そして、仏陀に至るための道、仏陀として至るための道をしっかりと歩き、そしてもといた天へ帰る、あるいは、天を超え、実際に認知経験滅尽の世界に没入し、そこで絶対的な境地を経験すると。それをわたしは君たちにプレゼントしたいと考えているのである。

◉光の神の救済

今生は、わたしにとってまだまだ中間の生である。わたしの本質はミトラとも、あるいはミスラとも、マイトレーヤとも呼ばれる本性である。そしてこのミスラ、ミトラ、マイトレーヤというのはすべて同じ意味を表わしているわけだが、仏教では、今生のこのカルパの最終に登場する救済者として、他の宗教では、光の神

として、あるいは盟約の神として示されている。

そして、この神々の救済が成功するか否かは、選ばれた、そして神に至るための道を歩いている君たちが、どの程度本気で、全力で、救済を意識し、自己の修行に没頭するかである。

まず、はっきりと言っておかなければならないことがある。それは、現象に左右されるような魂は、当然サマディに入れないということである。よく師の話の中で、これこれの問題があるからこうなんです、これこれの苦しみがあるからこうなんですというバカなことを言う師がいる。しかしよく考えてごらん。それは外側の苦しみである。外側の苦しみを止滅（しめつ）し、それを戒によってしっかりと防備し、次に内側に浮いてくるいろんな雑念を思索によって止め、そして、完全に心の空っぽな状態を作り出し、楽を捨て、不苦・不楽の状態になり、完全に煩悩を滅尽し、呼吸の静止した状態、これが第四静慮であるはずである。だとするならば、その第四静慮へ至ることのできる魂は、当然この現世においても堂々と偉大

なる結果を出したとしても、それは当然である。どうだそれは。

ということは言い方を換えるならば、師の活動すらできない人間は、決してこのサマディに入ることはできない。それが、その人のカルマの限界ということになる。そして、それをもってヒナヤーナというのである。

ところが、テーラヴァーダはこの現実の生活の中に身を置き、そこで、いろんな外的煩悩と対決し、そして内側に浮いてくる煩悩と対決し、そして自分自身を完全に現世に置きながら止めてしまうという、つまりこれこそまさに現世涅槃、現世煩悩破壊なのである。そこに到達することを目標としている。

当然、恵まれた環境で※リトリートに入り、そして煩悩捨断する、これはこれで素晴らしい修行である。しかし、もし現世にいながらきちんと記憶修習を続けることにより、必要なときは煩悩を止め、そして必要でないときは、しっかりと救済活動を意識し、自分自身の心、エネルギー、これを多くの魂に布施することができるならば、それはより偉大な修行者ということになる。

※一人で瞑想修行を行なうための個室。リトリート修行は、チベット密教でも行なわれている修行法である。

そして、もちろん修行者としての落ちこぼれは、リトリートに入らなければならない。これは、リトリートに入るということはもともと落ちこぼれなのである。なぜならば、現世から捨断されなければ解脱しないわけだからである。もちろん、現世にいて離愛著（りあいじゃく）することは難しい。現世にいて滅尽することは難しい。しかしそれをなすことができるならば、それは、王者の修行者、真の修行者、前生から類い稀な徳を持ち合わせた修行者ということになる。

この中のどの程度の魂が第四静慮までいくか、それは甚だ疑問である。いくら努力をしたとしても、ナーディーが完全に詰まっていたら、その一つ一つを破壊するのにかなり時間がかかる。よって今生で第四静慮まで入れない魂も出てくるだろう。しかしだ、第四静慮まで入れないとしても、努力し続ければ、いつしか必ず第四静慮に入り、そして仏陀（ぶっだ）の境地を体現できるのである。だからそれを意識し、日々の努力に励んでほしいと思う。

――後に続く多くの修行者がサマディをなすために、「奇跡の宗教」への第一歩を踏み出すために、多大な期待を背負ってアンダーグラウンド・サマディに挑戦した聖者ヤソーダラー最上善逝。

「絶対に失敗させられない。」

という尊師の力強い声が響きわたった。

果たして、五日後、結果はどうなったか……。

◉再び、成功

十二月十日、チェンバーが開いた。五日ぶりに、中へ新鮮な空気が流れ込む。前回と同じように弟子たちがじっと見守る中、麻原尊師が中に入られる。

……静かな時が流れた。しばらくして、麻原尊師の後より、聖者ヤソーダラー最上善逝が地上に姿を現わした。

唇が若干乾いて、痩せた感じはするものの、足元はしっかりと大地を踏みしめ

ている。

「成功した――。」

その姿を見たとき、弟子たちは安堵で胸をなで降ろした。

チェンバーから出られてすぐ、聖者ヤソーダラー最上善逝は、後に続く後輩たちに向けて、この五日間で体験した神秘的な世界を語られた。

◉第一天界から神聖天へ

（聖者ヤソーダラー最上善逝）まずお断りをしておかなければいけないのは、五日間、体験をメモしてたわけではなくて、すべて時間を前後してしまうし、曖昧なままにしか覚えていないんです。

まず、現世的な煩悩というか、例えば子供に対する執着が出てきました。わたしはもう識華（最上善逝の四女）が一歳になったときから、修行やワークで、識

華をお世話をしてくれるサマナに任せっぱなしという状態になっていましたので、そのことでは申し訳ないなというような執着が出た時期がありました。

で、それが切れてから、これはもう五日目に近いときだと思うんですけれども、雲がどんどんちぎれて飛んでいくようなヴィジョン、あるいは、何ていうのかしら、磨りガラスのような壁がずっと見え続けたりとか、あるいは、バルドーをどんどん抜けていくと神々が踊っている世界があったりとか、あるいは……。

（尊師） 今の順番は、正確に記憶しているといえる。例えば、人間が人間をやめて死んでいくときには、必ず人間界の愛着が出てきます。だからおそらく、ヤソーダラーにとって愛着の対象は、識華なんだろうね。だから、その識華への愛着が切れた段階で、雲が出てきて——まあこれも事実正しくて、その雲がちぎれたような形になるわけだけど——そして、エネルギーが下向きに向かっているか、上向きに向かっているかで違うわけだけが、彼女の場合、上向きに向かっているということの証明として、神々が踊っているヴィジョンを見たと。これは彼女が第

一天界の成長天のクンバンダの世界を通過して、神聖天に上がっていくことの現われなんだね。

もう、これは彼女にわたしは以前から、お前は猫神様だとか、あるいは、成長天だよとかいう話をしてるわけだけど（『えんじょい・はぴねす』十二月号に詳しい）。まあ、だから、デーヴァ界に入ったら必ず成長天の方向に向かうわけであって、その現われとして、そういう経験をしたということだね。

◉合成獣――破滅天の世界

（最上善逝）はい。で、それはもうサマディに入っていて見ているわけではなくて、もう意識がはっきりしてて見えているんですね。

（尊師）ちょっと待って。それは、サマディです。つまり、意識がはっきりしていないのは……。

（最上善逝）意識が二元、三元と分化しているのではなくて、一元のままなんで

す。

（**尊師**）ですから、それはサマディです。それはニルヴィカルパ・サマディという状態で、それはサマディです。間違いなく。

（**最上善逝**）あ、わかりました。で、どんどんそのヴィジョンが見えては消え、見えては消えしていくんですね。で、

「ああ、この先に何があるんだろう」

と思ったときに、どんどんそのバルドーに入っていってしまいました。

今、尊師が成長天、猫神様といわれたんですけれども、そのバルドーというのは変わっていまして、動物の形をしたものがたくさんぶら下がっているんですね。で、それを抜けて、神々が踊ってる世界にたどり着きました。意識を向けるとその中に飛び込んでしまうというのは、そのときに実感しました。

それから、あとは、金色の女性がスーッと天に昇っていくヴィジョン、あとは——あ、その前の段階では、本当にいろいろな砂漠だとか、水だとか、得体の知

れない生き物だとか、そういうものがどんどん見えていました。

（尊師） 得体の知れない生き物って、どういう形をしていた？

（最上善逝） 魚みたいなもので見たことがないものでした。

（尊師） それは泳いでいたの？

（最上善逝） いや、水の上に顔を出していたんですけど。

（尊師） 顔がついてた？

（最上善逝） はい。で、あと五日目はずっと音楽が聞こえていました。

（尊師） 破滅天を通って神聖天に入ったんだね。というのは、俗にいう合成獣って知っているかな。例えば、スフィンクスなんか合成獣でしょう。顔が人間で、胴体がライオンと、例えば。そういう合成獣というのは、破滅天、あるいは、まあ、第六天界、つまり為他神以神通創造欲望満足従事天、そういう世界のものなんだね。君たちも知っているとおり、もともと破滅天の王は第六天界の王だから、その世界を通って神聖天へ入っていったんだね。間違いのない経験だと思うよ、

それは。そこでは、魚も魚ではない、動物も動物ではない、そういう世界なんだね。

◉ニルヴァーナよりも素晴らしい世界へ

（最上善逝）で、今回はまあ、ここぐらいまでの体験しかできなくて。シャクティーパットの前というのは、非形状界（コーザル世界）の光の中に没入して、時が止まったまま、そのままでいられるという経験をしたことがあったんですが……。

（尊師）しかし、君は、前回はこういう経験はしなかったんじゃない？

（最上善逝）そうですね。

（尊師）何を言いたいかというと、前回君が経験したのはニルヴァーナで、今回君が経験しようとしてるのは、マハー・ニルヴァーナに至る道なんです。だからこれは、前回に比べて君は今回の方が徳を積んでいるということの現われなんです。

これはよくヒンドゥーイズムの中で、ある人は「空」、光に没入して、しかし神々を見ないと。ところが例えばラーマ・クリシュナと、ラーマ・クリシュナにエンパワーメントをしたグルがいるわけだけど、この二人の特徴の違いが、そこで説かれてるわけだけど、そのラーマ・クリシュナにエンパワーメントした修行者は光に没入する。つまり、空サマディができると。しかし神々を見ないと。ラーマ・クリシュナは神々を見るけど、空に没入しないと。

で、これは、彼らが無智だからその内容がわからなかったわけであって、要するに世界の低い部分を非形状界までズバーンと入った場合、この場合は当然光を見ると。しかし、経験的には人間界の経験から、そのまま要するにニルヴァーナに入ってしまうと。

ところがそうではなくて、マハーヤーナ（大乗）のプロセスに入ると、第一天界から例えば、次に引っかかりのある為他神以神通創造欲望満足従事天の第六天界をぶち抜いて神聖世界へ入っていくと。これはまさに、仏典の経験、経典どお

りなんだね。つまり、これは徳を積んでいるからである。だから、そこらへんが、まだヤソーダラー正大師の知識においての欠落だとわたしは思います。

ですから君が、苦しんだ、苦しんだと言っているけど、逆にそうではなくて、君自身のそのカルマが落とされて、やっと仏典のある部分の道筋を通過したということになるんだよ。わかるかな。

で、それから次はどうなるかというと、そのナーダの世界に入って、第一形状界からずっと上がっていくわけだ。そして、超越童子天（ちょうえつどうじてん）、アカニシタ天を通過して、最終的な空間無辺境、識別無辺境に入っていくわけだよ。わかるかな。

（最上善逝）わかりました。

（尊師）だからわたしが、「まだ君の今のその世界にはグルの本質自体は存在しないよ」と言っているのは、わたしの存在はそこにないと。

だからわたしは、マハー・ムドラーの成就者たちに、君たちが来世わたしについていくことは大変だろうねという話をしているわけ。わかるかな、言っている

ことは。それはいかに、偉大なる徳を積むか、そして、いかに煩悩を滅尽するか、いかに自分自身を救済のために役立てるか、そういうことを蓄積していって初めてより深い経験ができるんだということだ。

それから、わたしが普段見ているバルドーというのは、君が今回アンダーグラウンド・サマディで見たバルドーと同じだ。あれをわたしは、こういう会話をしながら見ているわけだよ。いいかな。

（最上善逝）はい、わかりました。

（尊師）まあ、とにかく偉大な経験をしたことは間違いない。そして、この形状界のバルドーをどんどん上に上がっていけば、次は空間無辺、識別無辺の本当の境地へ到達できる。

で、わたしは実をいうと君の酸素消費量を見ていて、やはり君は魔境だったなと思っているんだよ。というのは、最終解脱前に必ず魔境に入るわけだけど、まあ、その魔境からやっと抜け出してきて、少しずつ少しずつ天からの光が射し出

してきてるなというのがわたしの印象だね。

（最上善逝）すごく途中から明るくなりました。

（尊師）そうでしょ、それは魔境から抜け出してきている証拠なんです。魔境にも二つあって、例えば大川隆法氏のようにどうしようもない魔境もあれば、ヤソーダラー正大師が入るような最終解脱に向けての魔境もあるんです。だから、そこらへんはしっかりと理解するようにしなければいけない。

では、質問受けようかね。

◉死ぬことに恐怖はない

（司会）質問のある方はこちらの方にお願いします。

（質問者）ヤソーダラー正大師にお聞きします。バルドーに入るということはもちろん死の体験をするということなんですけど、実際のご自分の感覚で、もう自分はすごく死に近いとか、そういうふうな感じはあったんでしょうか。

（最上善逝） 何回もサマディの経験をしてたら死ぬんじゃないかとわたしは思いました。というのは、脈がすごく最後には乱れてきて、速くなったり遅くなったり、一分間でも差が出てきてしまうとか、ちょっと医学的にはわからないんですけれども、普通じゃないような状態になっていました。

（尊師） いや、それは正しいです。ただし、それでは死にません。微細なものすごいスピードの脈を打ちます、最後に。しかしそれは、測定器で測ってやっとわかるぐらいの微細なもので、しかしそのときはまだ形状界の究竟天、色究竟天（しきくぎょうてん）（超越童子天）に到達したときの状態なんです。これが、空間無辺境に本当に入り出すと、心臓は停止します、完全に。

ただね、死ぬという問題は、こういうことです。あなたが、例えばこの人間界よりその世界の方がいいと考えたら、そのとき死にます。だからそういう意味で、死の可能性は高いだろうね。

（質問者） 実際に、死んでしまうんじゃないかとか、そういう恐怖とかはありま

したか。

（最上善逝）死ぬことに対しては、恐怖はないです。

◉解脱者は自分で自分の死期を決める

死ぬことに対して恐怖がない――五日間の過酷な状況を乗り切った最上善逝の重みのある言葉である。

「死んだ方がマシだ！」

というのはよく聞く言葉であるが、実際、食べ物がなくなって死にそうになったり、脈拍が乱れて死ぬんじゃないかと感じたりしたときは、だいたい突っ張っている人でも、「死にたくない」と思うものである。「生きたい」というのは、人間の根本的な煩悩だからだ。

解脱者は、自分で自分の死期を決定するという。そういう意味では、死ぬことも生きることも自由といえよう。ただし、死後、どの世界へ行くかは、必ずしも

自由というわけではない。修行ステージによって選択支が違ってくるわけである。完全に自分の行きたい世界へはどこでも行けるというのは、麻原尊師のように最終解脱をしなければならないというわけだ。

◉六つの偉大なる神通力

ところで、インタビュー中、わかりにくいことが若干あったと思うので、少し説明をしたいと思う。

まず、初めに六神通（ろくじんつう）について言わなければならない。仏教でいわれる六つの偉大なる力である。

- 神足通（じんそくつう）　（空中浮揚やテレポーテーションを行なったり、高い世界へ飛んだりすることのできる能力）
- 天耳通（てんにつう）　（神々の声を聞いたり、遠くの音を聞いたりする能力）

・他心通　（他人の心を知る能力）
・宿命通　（前生を知る能力）
・天眼通　（一般に遠隔透視能力といわれているが、これは北伝仏教の間違いであって、実際には南伝仏教のいう死生智（ししょうち）のこと。死生智とは転生先を知ったり、生きながらにしていろいろな世界とつながる能力）
・漏尽通（ろじんつう）　（完全なる絶対なる神の叡智（えいち））

この六つのことだ。今回、聖者ヤソーダラー最上善逝が体験したのは、このうちの死生智である。つまり、最上善逝の今のカルマだったら転生するはずの世界、第一天界の成長天、第六天界、そして愛欲界を超えた神聖天――仏教では梵天（ぼんてん）といわれている世界の体験をしたのである。もちろん、肉体をテレポーテーションさせて、その世界へ行ったというわけではない。肉体から化身と呼ばれる〝もう一つの別の身体〟を抜け出させ、その身体によってその世界へ飛んでいったとい

うわけなのである。

仏典では、低級霊域と第一天界はつながっているといわれている。聖者ヤソーダラー最上善逝が、動物のようなものがたくさんぶら下がっているバルドー（低級霊域）を抜けて、神々の世界へたどり着いたというのは、この仏典の世界をまさに実体験したということなのだ。

他の魂の苦しみを背負うという大乗の修行を行なうことによって、最初にご紹介した小乗のニルヴァーナの境地よりも、より素晴らしい体験をした聖者ヤソーダラー最上善逝。シャクティーパットで受けたカルマを落としきったときは、よりいっそう素晴らしい体験を聞かせてくれるに違いない。

――この日、続けて、聖者マンジュシュリー・ミトラ供養値魂（当時マンジュシュリー・ミトラ正悟師）がアンダーグラウンド・サマディに入ることとなった。これからは、一時間程度の間を開けて休む暇もなく〝連続アンダーグラウンド・

サマディ〟である。

もうすでに二人が完全に成功を修めたとはいえ、やはり、見守る弟子たちの間では、緊張感が漂っていた。

そう、たとえ一人たりとも失敗するわけにはいかないのだから――。

第四章　時空を超えて聞こえる神々の声

聖者マンジュシュリー・ミトラ供養値魂

◉四百人の期待に応えて

……かすかに人々がざわめく声が聞こえる。約四百人もの信徒の方で埋め尽くされた会場の舞台中央に座っているのは、麻原尊師。そのすぐそばには、たった今、アンダーグラウンド・サマディを出たばかりの聖者マンジュシュリー・ミトラ供養値魂が、涼やかな表情で座っている。

今日は、「大説法祭」の日なのだ。衛星中継システムを使って全国のオウム真理教が一つになるこの催し――今回のメインは、この「アンダーグラウンド・サマディ」である。

期待に弾む人々を前にして、まず、麻原尊師が口を開かれた。

◉救済者の二つのタイプ

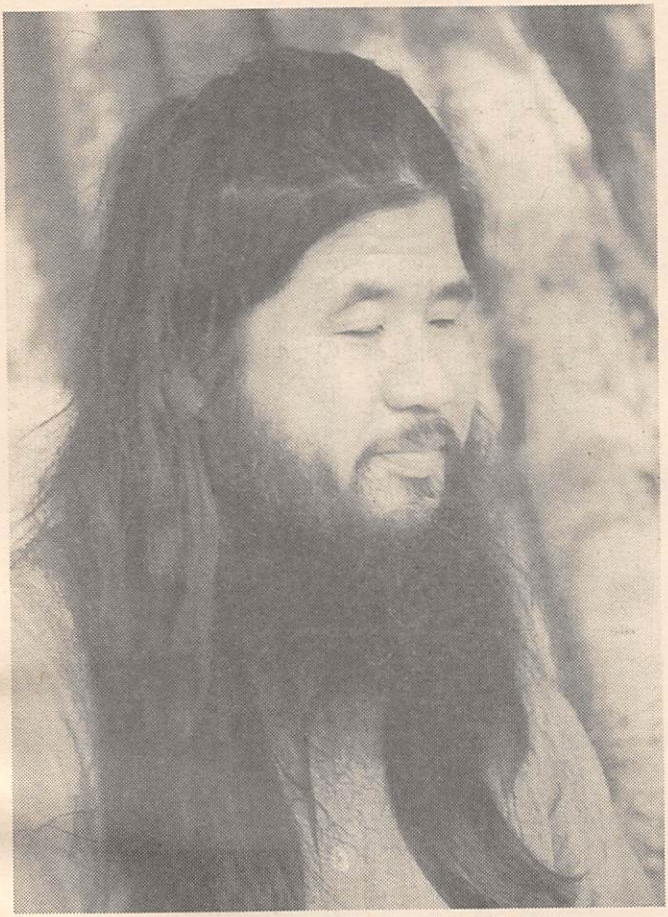
救済者が登場するとき、二つのタイプの救済者の登場の仕方がある。それは、

聖者マンジュシュリー・ミトラ供養値魂
元神戸製鋼勤務。1987年から本格的な修行の道に入る。88年クンダリニー・ヨーガ、90年マハー・ムドラーを成就。その優れた科学的才能を生かして、オウム真理教の科学部門を担当している。

第一の救済者の登場はその救済者そのものが神秘的な力を持ち、そしてすべての衆生を引きつけ、去っていくというパターンである。これは、よくインド宗教、つまりヒンドゥーイズムに登場するクリシュナ、あるいはラーマ等の登場がそれを物語っている。

第二のパターンの救済者は、これは主人公が救済者ではなく、主人公は救済者の率いる弟子たちであるパターンである。これは、代表的にはサキャ神賢がその典型的な例である。この後者のパターン、つまり多くの弟子たちを引き連れ、そして、その弟子たちがいろいろな神変を現わすと。もちろん、まあ、グルもそれを現わすわけだが、グルはどちらかというと教えを説く方に集中し、そして弟子たちがそれを実践することによって、こういうふうにすべての魂は変化できるんだよと。そしてわたしも、その第二のパターンの救済者ということができる。

この第一のパターンの救済者は世の中を変革する。その人の神秘的な力によって世の中の変革をすることはできるが、個々の魂の霊的水準を引き上げることは



麻原尊師の指導によって、弟子たちが次々と奇跡を現わしていく……。

しない。

第二のパターンは、個々の魂の、個々の生命体の質を引き上げる。これが、その救済者の意味合いなのである。

◉急に天才になった？——天耳通の体験

今回、マンジュシュリー正悟師がアンダーグラウンド・サマディ五日間を終えたわけだが、彼は中でいろいろな体験をしている。これは、初めに行なったマイトレーヤ正悟師、あるいは二番目に行なったヤソーダラー正大師と同じように。そして、その内容については——そうだね、表現としては天耳通と、それから禅的な色彩と、この両方を合わせたまさにヴィシュッダ・チャクラの完璧な体験といえるのではないかと思う。で、これについてはね、実際にマンジュシュリー正悟師にちょっといろいろ話をしていただいて、その疑問を時間があれば聞くという形で解決していきたいと思います。

（聖者マンジュシュリー・ミトラ供養値魂）今回、アンダーグラウンド・サマディに参加させていただいて、わたしとしては初めて、明確な天耳通の体験をかなりすることができました。

そのときの状況は、グルのことを観想すると、普通の状態なんですけれども、周りがパーッと明るくなって、それから今までにない、何というか非常に明晰（めいせき）な状態になりました。

その明晰さというのは、何か疑問に思ったことがあると即座にぱっと答えが返ってくるというものでした。それはわたしがワーク（奉仕修行）上いろいろと問題を抱えていたりするんですが、そういうこととか、どんどんと疑問を考えては、その答えを得ていたわけです。

しかし、初めはそれが天耳通とは思えなかったんです。自分の頭が非常に鋭くなったような気がしました。で、そうですね、例えば意識堕落天の乗り物について、尊師からいろいろと教えていただいているんですね。何か箱のようなもので、

地上から浮いている、そして、飛ぶときにカチンカチンと音がすると。例えばこれについては、「なぜ浮いているのだろうか」と思うと、即、「圧力によって浮いている」と。「何の圧力だろう」と思うと、「電子雲の反発である」という形でどんどんと答えが返ってくるんです。それで、今あらかたの構造がわかったところです。

それ以外にもあるんですが、例えば、修行に関して目を向けたときに、「いったい自分というのは何だろうか」とパッと思ったとき、一言、「グルの分身である」という答えが返ってきました。このときには、今までグルに対して疑念を持ったり、闘争を挑んだりしたことがあったんですが、それは結局自分自身を傷つけることであったことがわかって、愚かなことをずっとしてきたなと思って、非常に考えさせられました。

一言、ポッと答えを言ってくれるんですね。尊師は、「なんかコンピュータ的な天耳通だなあ」と言われたんですけれども。

じゃあ今度はと、欲張って、「最終解脱するにはどうしたらいいのだろうか」と考えたときに、一言、「無常」と言われました。これは、わたしがたくさんいろんなことを常と思っているわけですけども、これをもっともっと考えて捨断、捨て断たないといけないなあと思いました。

それから、ヴィシュッダ・チァクラに対応する煩悩である権力欲で引っかかっているんですが、そういったものについてはどうしたらいいだろうかと思ったとき、一言、「ザンキ」と言われました。これももっともだと思い、今、それについては考えているところです。

（尊師）ここで一つ解説をしておかなければならないのは、「わたしとはいったい何だろうか」、「グルの分身」という言葉が出てきたわけだけど、これには深い意味がある。

深い意味とは何かというと、要するに最終解脱をしていくということは、最終的には真我の独存位に至るわけである。ということは、まあ個性はあるにしろ、

真我の容態、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜というこの三つの容態を自分自身が得ていくというプロセスにおいては、まさに、グルと同等になるということである。そういう意味においてはグルの分身という意味は正しいと。

それからもう一つの意味は、修行のプロセスにおいて――つまり、今自分が経験していることは、過去にグルが経験したことであると。そうするならば、例えば自分の先に行っているものに対するいろんな疑念というものは、それはまさに自分の未来に対する疑念であると。そういう意味において、またこれも正しいということになる。だからまあ、そういう意味で「分身」という言葉が出てきたんだというふうに考えてください。

じゃあ、続けて。君たちの最も興味のある部分に入るそうだから聞こうか。

◉核戦争後の近未来に飛んで……

（供養値魂） それから、わたし自身が変化身（へんげしん）に意識が移って肉体から抜け出して、

近未来のどこか――場所の名前まではわからないんですが、海岸に出ました。そこではどういうわけか、人々が何かお面のような、何かゴムのマスクみたいものをかぶっているんですね。で、そこには顔の表情が描いてあるわけです。

で、「妙だな」と思っていたんですが、海を見ると、海は凍っておりました。叩いてみましたがカチンという感じで、凍っております。それで表面は、非常にたくさんの泡で覆われておりました。

そこにモデルのように長髪で綺麗な人がいたんですけども、その人の近くにわたしがおりまして、少しその辺りを歩きました。で、わたし自身は変化身で、肉体的には非常に綺麗な状態でした。で、その方も、そうですね、非常にプロポーションがよく、ビキニのようなものを着ていたのでわたしは裸だと思っていました。ところが、しばらくすると、ちょっと神妙な顔になって、「実はわたし、こうなんです」と、身体だと思っていたところをビッとチャックを開いて、中を見せてくれました。そうするとそこに非常に病んで、変形した醜い肉体が納まって

おりました。

これは、おそらく未来の核戦争後、気温が下がって海が凍り、人々の体、および顔とかが変形していた状態を表わしてるんだと思います。

（尊師）一つ聞きたいのは、その泡は何だと思うか。原因は。

（供養値魂）そうですね、何か洗剤のような科学物質なのか、それとも、北の方でよくある潮の華みたいなものなのか……。寒い海では、そういった泡状のものがかなりあるんですね。ちょっとその細かいところまではわかりませんでした。初めは、表面が凍ってるってわからなかったんです。泡があって。

あ、それから、言い忘れましたが、その打ち明けてくれたときショックを感じてしまいまして、どう言ってあげていいのかわからない状態のまま、変化身が肉体に戻ってしまいました。それが少し悔やまれるところです。

（尊師）君たちが、「小乗のツァンダリー」のイニシエーションを受けたら、そのヴィシュッダ・チャクラの詞章の中に、〝わたしにこの宇宙の実相を教えてく

ださい〟というような言葉があるわけだけど、まさにこの予言のチャクラというのは喉なんだね。で、この喉のチャクラには、三つのヴェーダが含まれていると。そして、この三つのヴェーダを知る力があるといわれています。

まあ、オウム真理教ではいろいろな研究をしているわけだけれども、特にこの「喉」、そして「意識堕落天」、「宇宙」、これらの考え方が一つであり、そしてこの宇宙そのものを支配しているのは、意識堕落天である。で、意識堕落天は当然喉のチャクラの支配の神だから、その宇宙のヴェーダの真相がそこに含まれているということを表わしているんだと。で、それをまあマンジュシュリー正悟師は実体験したんだということなんだね。

では、心のプロセスについて、いろいろ聞いてみようか。

◉死の模擬試験

（供養値魂）そうですね、まず、意識が非常に鮮明になりました。それで、思考、

その他は非常に素早く回るようになりました。で、この原因の一つとしてわたしなりに考えたところでは、例えば、地元素を取っていない、水元素を取っていない、つまり食物と水分を取っていないということで、次第に火元素優位の神々に近い状態になり、思考の速度も早くなっていくのではないかという気がいたします。ま、化学的には、体液の濃度が濃くなり、反応速度が早くなるというか、そういうことがあるかもしれません。

それで、初めは尊師に指示されていた「捨断の瞑想」、これを繰り返しておりました。心の状態としては非常に落ちついて静かな状態でした。ただ、普段の生活と違いまして、時間が進まないんですね。普段の十倍ぐらい考えたのではないかと思うぐらい経ってもまだ——まあ、そんなにしょっちゅう時計を見たわけではありませんし、はっきりと時間経過をつかんでいるわけではないですが、とにかく時間が進まないという状態でした。

それで、四日目ぐらいになって、尊師の指示に反して別の瞑想をしてしまった

んですね。そうすると、気分的には非常にハイになって、気持ち良かったわけなんですけれども、そこでどうも酸素がかなり消費されたようでした。で、それでしばらくしたとき尊師から連絡があって、「煩悩的になっているぞ」と言われました。それから、「酸素の値も減っている」と。そういうことを聞きまして、やはり、そういう心の変化がはっきりと数値として出るアンダーグラウンド・サマディというのは非常にいいシステムだなと思いました。

で、中で考えたのはやはり、「これは一種の模擬試験だな」ということでした。模擬試験というのは、実際の死に対する模擬試験ということです。実際、入る直前に詰め込みではないですが、『タターガタ・アビダンマ』（麻原彰晃著：オウム出版）であるとか、特別教学システムとか、ひたすらとにかく尊師の説法を聞いて読んでため込んでいきました。

というのは、やはり死んだとき、いくら立派な経典を持っていても、あるいは説法カセットを持っていても持っていけないですから、これは覚えていかないと

仕方がない。で、その詰め込んだ教えをもとにして考えていったわけです。それで、やはり信徒さんにもそれをお勧めします。いつ死が襲ってくるか、はっきり言ってわかりません。だから教学ですね、これをやっていて、非常に助かったと思っております。

それからあと、やはりイニシエーションですね。例えば、「バルドーのイニシエーション」、これはわたしは受けておりますから、死後、実際どういうステップでどういう世界が展開されるか、これは一応理解しています。これは非常に安心であると。それから、例えば「グルヨーガ・マイトレーヤ・イニシエーション」の瞑想プロセス、これも何度か修習しておりますので、どのように、グルに対して縁を深めたらいいかというか、すがったらいいか、これもわかると。あるいは「小乗のツァンダリー」では、そうですね、世界が変わっても意識が連続できるように訓練しています。こういう、サマナ（出家修行者）になってから尊師に与えていただいたイニシエーションの果報というのがありますので、その点におい

ては非常に安心でした。

◉成就者のサマディ――ニルヴィカルパ・サマディ

（尊師）ま、実際にマンジュシュリー正悟師の心の働きと、それから酸素消費とが全く一致した形で、データとして出ているんだね。ちょうどマンジュシュリー正悟師が体験を始めた前の状態のときは、酸素消費量は測定未満と。つまり、どういうことかというと、もう完全に三昧の状態であったということができると思います。

そして、三昧にはサヴィカルパ・サマディとニルヴィカルパ・サマディと両方のサマディがあるわけだが、一般にはサマディというのはサヴィカルパ・サマディをサマディと見ているわけだね。しかし、成就者のサマディというのは、ニルヴィカルパ・サマディである。

で、このニルヴィカルパ・サマディとは何かというと、通常の意識を得たまま

のサマディということになります。つまり、完全に意識のはっきりした状態で、すべてをコントロールする状態と。

で、マハー・ムドラーを成就した後に、特にマンジュシュリー・ミトラ正悟師の場合、君たちもよく知ってのとおり、変化身の体験が多いわけだね。で、変化身の体験の次に来るのは何かと。経典どおり、天耳通の体験、これを完璧に行なってきている。で、次、マンジュシュリー正悟師が行なうのはおそらく完璧な他心、そして宿命、そして死生智、つまり天眼だね、それから漏尽という、プロセスに入っていくはずです。

で、これらは、すべて代謝が完璧に落ちて、煩悩が捨断された状態で生じるものです。ですから、このニルヴィカルパ・サマディに彼が入り、完全に天耳通を経験したということは、次は意識のある状態で、他人の心をズバズバと見抜く力が宿る、もうそのステップに来たと。で、これは、彼自体が次のサマディ、つまり次はまあ一週間のサマディを考えているわけだけど、そのころに完全に生じる

はずです。このような形でね、一つ一つ確定させていくと。神秘的な力を確定させていくと。

そして最終的には、完全なる漏の破壊をすることによって、仏陀となると。ですから、今の正悟師が、例えばマイトレーヤ正悟師が宿命、ヤソーダラー正大師が死生智という段階を進んでいるわけだけど、このような形で最終的に漏の破壊をなす弟子たちが、そうだね、来年には、今の正悟師の四分の三ぐらいは達成するのではないかと考えています。

◉なぜ、霊性が飛躍的に高まるのか？

まさに、仏典に記されているとおりにサマディに入り、そして神通力のプロセスを体験していく――。

もうおわかりのようにアンダーグラウンド・サマディは、単にサマディの証明というだけではなく、それそのものが霊性を高める大変素晴らしい修行なのであ

る。

では、なぜ、フツウの人間なら恐怖にさえ思えるこの修行が、このような効果をもたらすのか？　その秘密を麻原尊師はこのように語った。

このアンダーグラウンド・サマディの科学的データは、例えば、医学の文献に日本の関西のあるお寺の管長さんが五日間の断水断食をしたという記録が残っていると。その途上で亡くなった人もいるというような記載があります。

これからもわかるとおり、ただ単に断水断食の五日というもの、それだけでもかなり大変である。それに加えて、ブラックボックスの中でのサマディと。このブラックボックスというのは、中が真っ暗闇の状態で——まあだいたいこれはＮＡＳＡで実験されたデータによると、一週間ぐらいまではベッドで横になって何とか耐えることができる。ま、これがかなり不安定な状態だと、十時間ぐらいで駄目になってしまうと。このような二つの要素が絡み合った状態での瞑想という

ことになる。

ところがチベットの仏典などによると、あるいはチベットの成就者たちの言葉を借りると、このリトリート、完全に密閉されたリトリートは、最もエネルギーを回復するというふうにうたわれている。

これはどういうことかというと、皆さんもよくわかっているとおり成就者とそれから普通の人とでは使うエネルギーが違う。そしてその使うエネルギーは、その人が、他の、つまり低いエネルギーの影響を受けなければ受けないほど、エネルギーの漏れがなくなり、そして、それによってその人は自分のエネルギーを回復し、神秘的な力を増大する。例えばそれはマイトレーヤ正悟師、ヤソーダラー正大師、あるいはマンジュシュリー正悟師の体験を見ても明らかである。

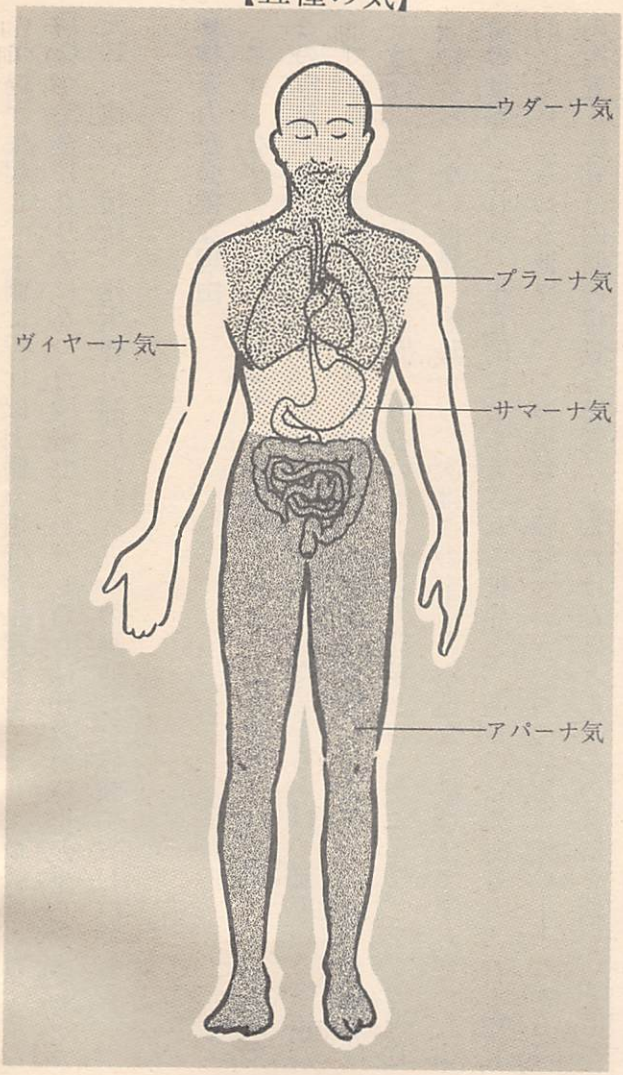
では、なぜそうなのかと。これは、四つの静慮の第一静慮を考えればよくわかることである。つまり成就者というものは、思索に対して大変優れている。まあ、この思索を仏典では熟考と吟味という言葉を使っているわけだよね。この熟考と

は何かというと、原因についてあれやこれや考えると。吟味とは何かというと、その結果についてあれやこれや考えると。そしてその結果から次にどのような因を生じさせるのかあれやこれや考えると。そして完全に捨断すると。

ところがだよ、外的な情報に心が翻弄されているとき、この熟考と吟味というものができるだろうかと考えた場合、当然それはできないということになる。つまり、ブラックボックスの中で、真っ暗闇の中で、そして煩悩が生起する状態をわざとつくり、その煩悩生起に対してしっかりと見つめ、自分の内側の要素を捨断していくと。これは当然、内側の煩悩はどんどんどんどん弱まり、それによって管の詰まりが取れ、そしてエネルギーの流れが正常になり、高い世界の経験をすることになるわけである。

そして、もともとわたしたちの風は、つまり、アパーナ気、サマーナ気、プラーナ気、ウダーナ気、ヴィヤーナ気というこの気はエネルギーである。そしてこのエネルギーは、管を通じて動き回っているわけだけど、これが下側に行けば下側

【五種の気】



の煩悩が生起し、上側に行けば上側の煩悩が生起する。そして最終的には、その煩悩が完全にクリアになった段階で、わたしたちは呼吸の停止が生じ、そして、天耳・他心・宿命・死生智・漏尽という五つの神通力を体験するわけである。

◉神通力が必要な理由

では、なぜこの五つの神通力が必要なのかと。それはね、例えばだよ、宇宙のこの構造を見た場合——ま、宇宙というのは、わたしたちが目で見ている宇宙だけではなく、愛欲の世界、形状の世界、非形状の世界という三つの世界を経験する場合、当然、天耳の世界、あるいは、他心の世界といったような、まず、視覚的にとらえない世界、それから、次はこの宇宙の創造から破壊までをも含めた宿命の世界、これは、視覚的にとらえられる世界と。あるいは死生智。これも視覚的にとらえられる世界と。この視覚と聴覚という二つの武器を使い——しかもこの視覚と聴覚は内側の視覚と聴覚になるわけだけど——この武器を使い、そして

完全に内側を洞察して初めてすべての世界を知ったということになると。

これはまさに最上正覚者（さいじょうしょうかくしゃ）といわれるゆえんである。この最上正覚者というのは、これ以上にないすべてに対して覚醒をした者ということだね。

で、これらの経験をすることにより、わたしたちの今とらわれている煩悩がわたしたちに対してどのような働きをするかということが理解できるようになる。

例えば、それは「苦しみ」、「苦しみの生起」、「苦しみの滅尽」、「苦しみの滅尽に至る道」のどの部分にあたるかが理解できるようになると。もしこの三界、つまり愛欲の世界、形状の世界、非形状の世界を理解することができなければ、わたしたちは今この現時点での楽、苦にとらわれ、あるいは現時点での利益、不利益にとらわれることになる。それによってわたしたちは、結果的には、苦しみをより増大させた形で、輪廻転生（りんねてんしょう）を繰り返さなければならないこととなるわけである。

例えばだよ、もしこの最上戒蘊（さいじょうかいうん）に到達したならば、強欲にこの世でお金を貯め

ることによって低級霊域へ転生したり、あるいは嫌悪することによって地獄へと至るということがね、はっきりと体験的に理解できるわけである。

そして皆さんは、その体験をする、それを自分のものにするための教え、そして実践というものを有しているわけである。当然この教え、それから実践を有しているということは、皆さんがそれを一つ一つ積み上げていくだけで、それらを完全に超えることができ、そして、本当の意味での正しい生き方ができることになる。

◉偉大なるグルに導かれて

次々とサマディの秘儀を明かされる麻原尊師。そんな偉大なるグルに導かれて、見事にアンダーグラウンド・サマディを成功させた聖者マンジュシュリー・ミトラ供養値魂。麻原尊師の予言どおり、次のサマディが行なわれたときには、他人の心をズバズバ見抜く他心通の世界を語ってくれるのだろう。

しかし、それは、また機会があればお伝えすることにして、次は、聖者ミラレパ供養値魂のサマディ体験をご紹介したい。

またまたあっさりと偉業を成し遂げ、神秘的な世界を体現してくれるだろう……と思いきや、思わぬ苦戦を強いられることになった聖者ミラレパ供養値魂（当時ミラレパ正悟師）。その原因となったのは、スヴァディスターナ・チャクラの〝結〟であった――。

第五章　断水断食・超覚醒で五日間

聖者ミラレパ供養値魂

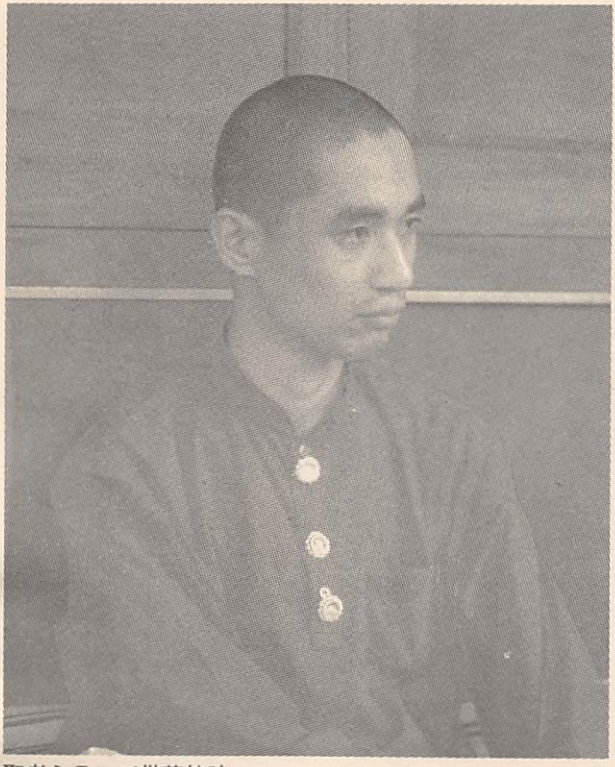
◉ポイントとなるのは日々の修行

――いつものエネルギッシュで活動的な雰囲気とは違って妙に静かだ。しかし眼光は普段よりも数段鋭い。かといって、〝怖い〟などという感じはしない。

アンダーグラウンド・サマディを終えたばかりの聖者ミラレパ供養値魂は、さほど疲れた様子もなく、大勢の後輩たちを前にしてさっそく自己の体験を語った。

（聖者ミラレパ供養値魂） 今回は率直に申し上げて、神秘的な経験というのはあまりなかったんです。これはやはり日ごろの修行が不足していたのではないかと思います。

まあ、途中で、例えば離愛著（りあいじゃく）の瞑想をしていると、深い意識状態に入って身体が固定されるようなことは起こったわけですが、そこからの本当の意味での変化身の体験とか、そういったものがなかったというのは、普段のワークと修行のけじめがしっかりとできていなかったのではないかと思います。要するに、現世を



聖者ミラレパ供養値魂
元マルサンアイ勤務。1987年クンダリニー・ヨーガ、90年マハー・ムドラーを成就する。エネルギッシュで、バイタリティーあふれた行動力は、周りからの尊敬を集めている。

捨断するというのが、日ごろからうまくできていなかったのが今回の原因ではないかと思いました。

それで、このサマディの最中にも、現世的な煩悩が出てきてそれを捨断すると。まあ、これの繰り返しだったわけですが、途中で酸素の消費が比較的に少なくなっていったのは、やはり、尊師のアドバイスによって「厭逆(えんぎゃく)の瞑想」ができ始めたからであったのではないかと思います。

反省としては、これはワークの必要上もあるかもしれませんが、やはり現世のデータというか、雑誌を読んだりして修行の妨げになるデータを入れたことによって、このスヴァディスターナ・チャクラにけがれが生じて、〝結〟ができて、それによって懈怠(けたい)が生じてしまったということがあったと思います。

このことから考えて、サマナの皆さんには、日ごろからの瞑想が、修行がいかに大切であるかというのを訴えたいと思います。

もちろん直前になって二、三日修行らしい修行はできたのですが、それ以前に

自分がなしてきた日ごろからの修行のみが、わたしたちが死後持っていけるものではないかと思いました。この日ごろの生活を「生起の過程の瞑想」とするならば、まさしくこのアンダーグラウンド・サマディの最中は「究竟の過程の瞑想」ではなかったかと思います。ということは、その日ごろの修行と、日ごろのワークというものがきちんとできた上で、このサマディにもし入っていたとしたならば、大きな成果があったのではないかと思います。

ですから、皆さんに対しては、日ごろからワークだけではなく瞑想修行をきちんと行なって、そしてその最中において、きちんと現世を捨断してといったこの繰り返しを行なった者のみが、このサマディの最中においても大いなる成果があるのだということを言いたいと思います。

まあ、わたしは以前リトリート修行には入ったことがあったわけですけれども、それに加えて今回のアンダーグラウンド・サマディでは断水断食があったということで、ある意味での死の恐怖というのがあって、非常にいい意味での経験がで

きたと思います。そして、この最中に感じたことは、やはり、日ごろから培ってきたもののみしか結果を出さないんだということでした。

ですから皆さんも、いつこのような状態になるかわかりません。それはこのチェンバーの実験ということだけを指しているのではなく、死というものを目の前にしたときでもそれが言えると思います。そのときになって後悔したのでは遅すぎると思います。いつでもその準備ができて、最終的にはこの日常の生活において修行しないでも、つまり修行時間を取らないでも、いつでも自由にサマディへと入ることができるような状態に自分をつくり上げていくこと、これこそが本当の意味で大切なことではないかと思います。

わたしにはある意味で錯覚があったのではないかと思います。つまり、このサマディの前に少し修行さえすれば何とかなると。しかしそうではなくて、最終的には修行しなくても、いつでもサマディに入ることができる状態、これを目指さなければいけなかったのではないかと思います。

◉エネルギーの流れが止まる

神秘的な経験はあまりなかったと語る聖者ミラレパ供養値魂。その原因は、一般の雑誌などを読んだために、スヴァディスターナ・チャクラにエネルギーが集中し、そこでエネルギーの流れが滞ってしまったことだという。

「どうして、雑誌を読めばエネルギーが滞るんだ？」

と疑問に思われるかもしれないが、今の社会では、グルメ、スポーツ、性的快楽、暴力……など、低レベルの煩悩をかきたてる様々な情報が渦巻いている。当然、雑誌にも、それらの情報が満載されている。そのデータを取り入れることによって、下位の煩悩が生起し、その煩悩に対応するチャクラのところでエネルギーの流れが止まってしまうということなのだ。そして、エネルギーが上に上がらなくなってしまうのである。

エネルギーが上に上がらないと、当然、高い世界の体験、本当の意味での神通力の体験というのはできない。よって、今回、聖者ミラレパ供養値魂は、スヴァ

ディスターナ・チァクラの結のために、神通の体験があまりなかったということなのである。

もちろん、本来のミラレパ供養値魂であれば、このようなことは起こらなかったであろう。しかし、麻原尊師の意思される大乗の救済のために広報活動に専念されていたため、そのようなけがれたデータを入れなければならず、結果的に結が生じてしまったのである。

しかし、それでもさすがマハー・ムドラーの成就者である。五日間の断水断食については難なくこなし、超覚醒状態を保たれたという。

◉医師も不思議——断水断食・不眠で平気

（司会）それではこの機会に医師のヴァジラティッサ師の方から、この五日間の断水断食、あるいは酸素消費、このあたりの医学的な見地について、少し話していただきたいと思います。

（ヴァジラティッサ師）まず、五日間の断水断食についてですが、やはり文献的には生命の危険があるぎりぎりぐらいだと思います。実際の例では、比叡山で七日間の断水断食という記録が昭和に入って数人ぐらいありますけれども、それ以外にですね、やはり五日間でもちょっと生命の危険があるというデータもあります。

あと、真っ暗闇に関してですけれども、地中では外界の音も聞こえにくいという話ですが、そういう中に入れますと、だいたい、まあ、これはアメリカ人のデータですが、三日ぐらいで幻覚が見え出して気が狂ってしまうと。そういう文献があります。

あと、それから、排尿排便なんですけれども、通常わたしの経験では、男性の場合、尿が一日出なければ死んでしまうんです。ですが、五日間全く出ない。これも、脅威的な数字だと思います。

酸素消費量については、本当になぜこうなるのか医学的に説明するというのは

非常に難しくて、ちょっとわたしの医学的な知識で説明するのは無理がありますね。これは。だいたいそんなところですが。

（供養値魂）それから、まあ、当たり前だと思うんですが、五日間は不眠の状態、覚醒状態です。

（ヴァジラティッサ）それも、記録ではその程度の不眠の記録はないことはないと思うんですけれども、実際の断眠実験というのは、例えば比叡山の七日の断水断食のときも断眠しているわけなんですけども、後ろから人が常に突っついているということなんですね。その他の断眠の記録を読んでみましても、常に横から人が起こすというような感じなんです。

それで、今回のように自発的に長く起きるというのは、これもすごいと思うんですが、なぜそうなっているのかというのは、やはりこれもわからないとしか申し上げようがありません。

◉次々と常識を超越する修行者たち

医師の資格を持つ出家者が所見を述べるが、やはりどうしてこうなるのか医学的には説明し難いらしい。「うーん……」と笑いながら、首をかしげる。

驚くことに、楽々とアンダーグラウンド・サマディをなし遂げる先達たちの姿を見て、後輩の修行者が同じように平然と長期間の断水断食を行なうようになってきているという。麻原尊師が、ヴァジラティッサ師に引き続きこのような話をされた。

実は今、クンダリニー・ヨーガの修行に入ってるタントラデュパが、修行をやりながら四日間の断水断食を行なった。で、これはなぜそういうことができるのかというと、マイトレーヤから始まり、ヤソーダラー、マンジュシュリー、ミラレパと、このように成就者が五日間の断水断食を平然と敢行すると。そうすると君たちの観念の中に、五日間、飯を食わなくたって大丈夫なんだと、五日間飲ま

なくたって大丈夫なんだということが理解できるようになる。

実は、これは仏典の中によく説かれていることだけども、例えば、ある在家の信徒が出家したくなると。ところが父母が反対すると。よって一週間、断水断食をして親に抗議すると。そして衰弱したその子供を見て、仕方がなく、サキャ神賢のもとに出家をさせるという例が仏典にいくつか出てきます。これらを見てわかるとおり、この五日間の断水断食そのものは、その当時、つまりサキャ神賢の時代では大したことではなかったと。しかし、まあ、その時代でも一週間の断水断食は、死を意味していたと。つまり、それだけこの飲まず食わずというのは、大変な修行であるということである。

◉スヴァディスターナの〝結〟

今回、ミラレパ正悟師の場合、ポイントとなったのはスヴァディスターナの結である。これはどういうことかというと、スヴァディスターナは東洋医学的な見

方をするならば、先天の生命エネルギー、生まれながらの生命エネルギーの蓄えられているところと。そして、その生命エネルギーが、結局、人間的思考をする場合、そこに集中する。よって、そこから体全体にプラーナを流せなくなると、ナーディーを通して。

で、それに四日目の朝気づいてアドバイスをしたわけだけども、二回、三回とアドバイスを行なって、彼自体修行に集中するようになって、まあ、今日中へ入ってみて、「あー、本当に綺麗な修行者のエネルギーだな」というのがわたしの印象でした。

つまり、プラーナというものは、その人の心の働きの存在しているチャクラに集中されるのだということである。

ところで、ここで三つの門について説かなければならない。三つの門とは何かというと、これは下腹部に存在するスヴァディスターナの位置より若干上に存在する下庭（かてい）とか、下の庭とか、下門とか、下の門とかいわれているエネルギーの中

枢、これが先程言った先天の生命エネルギーの源の宿る場所である。第二番目は、中庭とか、あるいは中門とかいわれるちょうどアナハタ・チャクラのところに存在するエネルギー・センターである。そして第三門は、上庭とか、あるいは上門とかいわれるアージュニャー・チャクラに存在するエネルギーセンターである。

だいたいこれは、密教的秘密チャクラと、それからアナハタ・チャクラ、そしてアージュニャー・チャクラに一致している。そしてこの下庭は、※変化身。中庭は、報身。そして、上庭は法身に対応するという考え方もある。これらは、例えば、マニプーラが変化身、アナハタが法身、そして、ヴィシュッダが報身という密教的考え方とは若干違っている。なぜ違うのかというと、これは仙道的なものの考え方だからである。

そして、まさにミラレパ正悟師の場合、この下庭にエネルギーが集中したわけである。もし、彼が、もう少し早くもう少し強烈な厭逆の瞑想を行なっていたら、今回は大変面白いニルマーナカーヤ、つまり変化身の体験が数多くできたはずで

※変化身・法身・報身・本性身・金剛身を五法身という。
『マハーヤーナ・スートラ』（麻原彰晃著・オウム出版）参照。

ある。まあ、しかしそれはね、そういう変化身の体験そのものも若干行なったみたいだけど、それにもこだわらず、とにかく自分の目的とする断水断食・覚醒の修行に集中したミラレパ正悟師は、偉大であるとわたしは思います。

◉覚者へ至る道

ところでこれらの修行は、あくまでも、先程述べたとおり、君たちの指針のために行なわれているものである。つまり君たちが指し示されている道、それは人を超えた、そして仏教的な成就者となり、そして供養値魂、最終的には覚者（かくしゃ）に至る道筋、これを君たちに指し示すために、わたしが、君たちの前で弟子を使って奇跡を見せているのである。

次のステップは何かというと、より密閉度の高いステンレスのチェンバーを利用し、そこでより精密な測定をしたいと考えている。そして、ヤソーダラー正大師、マンジュシュリー正悟師といった形で、一週間のアンダーグラウンド・サマ

ディを敢行したいと考えている。

これら一つ一つのステップが、君たちの日々の修行の身近な目標となり、そして、記憶修習、思索、サマディ、智慧、解脱へと一歩一歩進んでくれるならば、それは今一生懸命、アンダーグラウンド・サマディを行なったミラレパ正悟師、あるいは、マンジュシュリー正悟師、ヤソーダラー正大師、マイトレーヤ正悟師も報われるのではないかと思います。

◉サマディ、智慧、そして解脱へ

ベストコンディションではなかったが、それでも目的とする断水断食・覚醒の修行に集中し、そして素晴らしい結果を出した聖者ミラレパ供養値魂。この先達の姿を見て、多くの修行者たちが、サマディ、智慧、そして〝解脱〟という偉大なる道を徐々に歩き始めようとしていた……。

第六章　過去世への旅

聖者サクラー供養値魂

◉第五番目の成功者

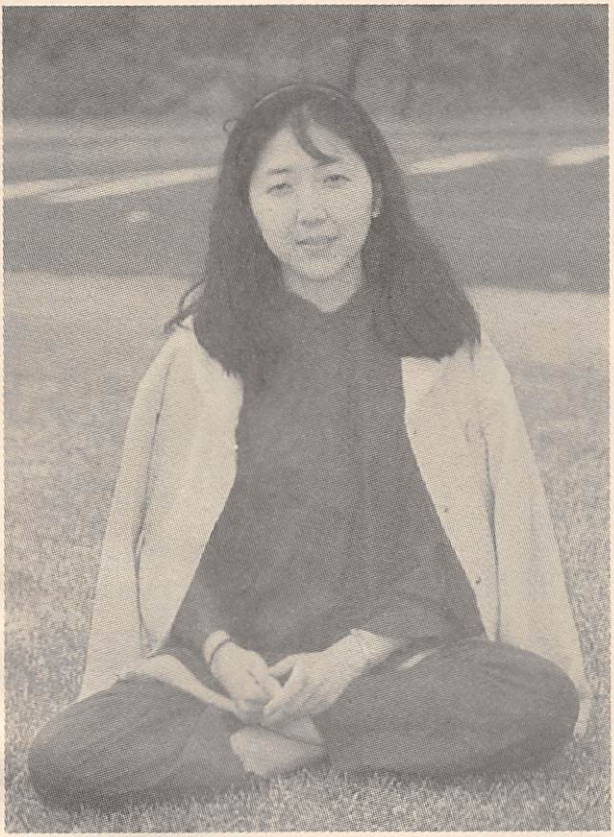
チェンバーの上に盛られた土を払う弟子たちの表情も、あまり緊迫した感じはなく、ずいぶんと和らいでいる。聖者マイトレーヤ智徳成就者から続く第五番目のアンダーグラウンド・サマディ――。

期待どおり、チェンバーの中から五日ぶりで出てきた聖者サクラー供養値魂（当時サクラー正悟師）は、いつものように優しい笑みを浮かべ、しっかりとした足取りで歩き出した。

「何か、また素晴らしい体験をされたのかな？」

そう思わせるような雰囲気である。

果たして、その予想は間違ってはいなかったようだった。過去世を知る宿命通、〝三悪趣（さんあくしゅ）〟の体験などドラマティックで興味深い聖者サクラー供養値魂のサマディ体験。それは、先達の方たちに劣らず素晴らしいものだった。



聖者サクラー供養値魂
元日産火災勤務。尊師の最も古くからの弟子の一人。1988年クンダリニー・ヨーガ、90年マハー・ムドラーを成就。ホーリー・ネーム「サクラー」は天眼第一と称えられた仏弟子に由来する。

◉光の世界――クンダリニーが吹き上がって

（聖者サクラー供養値魂）今回わたしがこのサマディで経験したことをお話しさせていただきますけれども、まず一番に感じたことは、このサマディというか瞑想というのは、自分自身がどのような要素を持っているかということを体験する一番の修行なんじゃないかということでした。

十二月二十日から、二十五日、今日までチェンバーの中に入ってたんですけれども、日にちを追って体験的なものを述べさせていただきます。

まず初日、尊師のイニシエーションを受けて、そのままチェンバーに入ったんですけれども、まあ、一つにはイニシエーションでいただいたパンが胃に少し重くて、それが苦しかったのもあるんですけれども、それよりもものすごくクンダリニーのエネルギーが上がってしまって、もう目を閉じていてもものすごく昼間のように明るいんですね。それで、ものすごい熱が出てきて、頭に気が集まってしまって、座法を組んでいてもそのまましびれてしまうんです。で、しびれてし

まって意識がなくなってしまったんですね。そして、そのまま意識がなくなったまま、気がついたときは丸一日、二十四時間後だったんです。

時計を持っていなかったらわからなかったんですけれども、日付のある時計を持っていたものでわかりました。わたし自身も目が覚めたときにはびっくりしてしまって……。

わたしは起きるときというのは必ずいつもそうなんですけれども、呼吸している自分を認識して、その後に目が覚めるんです。「あ、今わたしは呼吸をしている」と。で、それに気がついたとき、意識が戻ってくるんです。

それで、起きたら、まあ、二十四時間経っていたわけですね。実はその中で、一回だけ目が覚めたんですけれども、「あ、座法が崩れている」と思って組み直すと、そのままもうエネルギーが上がって体がしびれてしまって、またそういう状態に入ってしまいました。だからわたしが、正味意識を持って体験したサマディというのは、四日になります。

二日目過ぎてからは、サマディに入っていないときと、サマディに入っているときと極端に二つに別れるようになりました。

◉ゼロ歳のときまで思い出す——宿命通

その一日目の中でもいろんな経験があったんですけれども、一つだけ印象的だったのが、これは未来か過去かわからないんですけれども、尊師と共に何か発明しているヴィジョンを見たんです。で、尊師が何かの発明を手がけていて、わたしと、他の何人かの正悟師・正大師と、それからアーナンダ師とかが出てこられて一緒に何かを発明してるんです。そして、まさにその発明ができた、完成したというときに、ヴィジョンが終わってしまいました。

それから二日目から三日目というのは、非常に意識が鮮明になってきていて、集中すると自然に自分の呼吸が止まるのがわかるようになりました。で、そのとき、尊師から与えられた思索の課題があるんですけれども、それを一つ一つ集中

して思索しているといろいろとヴィジョンが出てくるんです。そして、そのヴィジョンを意識のある状態で解析していくというのが何度も続きました。で、そういうふうに何かのことについて集中していると、それに対応するヴィジョンが出てきて、そのヴィジョンに対してまた思索すると、こういうことを続けていったんです。

それと同時に、尊師からさっき宿命通のプロセスだというふうに教えていただいたんですけれども、今、わたし三十なんですが、三十歳からさかのぼって、ゼロ歳時になるまでの記憶というのを一つ一つさかのぼっていったんです。

それがもう普段はすっかり忘れているような出来事だとか、そういうのを一つ一つ正確に思い出してくるんですね。ＯＬのときのことだとか、あとは修行を始めて尊師に会ったときはこうだったとか、尊師はこのときこういうことをおっしゃったとか、そういうことをもう克明に一つ一つ思い出してきて、それがずーっと連続しているんです。例えば、そこで意識が途切れて別の何かの瞑想をしたとして

もまた続きのヴィジョンが――例えば意識が途切れる前に二十九のときのヴィジョンを見ていたとしたら、別の瞑想をした後に二十八のときのヴィジョン、二十七のときのヴィジョンというふうに出てくるようになりました。

それで、わたしの家庭は、父が会社員だったためにすごく引っ越しが多かったんですけれども、引っ越した家の本当に隅から隅までを思い出すような経験をして、一番最後に、すごくちっちゃい幼児期のころを思い出しました。そして、その記憶と同時に父に対する非常に強い執着というのが出てきてんです。

これは、ヴィジョンでも見たんですけど、前世において父はわたしの恋人だった生があったみたいで、その父に対するその執着ゆえに、今生、まあ、父と母のところに飛び込んできたんだということが、わかりました。人間界に生まれてくるときは、女性の場合、父親に対する執着によって生まれてくるといわれていますけれども、それを実体験したということなんです。それで、全くいつもはそんなのは感じないんですけれども、父に対するすごく強い思いと、それからものす

ごい寂しさみたいなものを最後に感じて、このさかのぼりの経験が終わりました。

それと同時に、いくつかのヴィジョンを見ました。これは前生の記憶だというふうに尊師は教えてくださったんですけれども、中国転生がわたしも多かったみたいで、中国時代に尊師に空を飛ぶ妖術を教えてもらっていたりしたことも思い出しましたし、あと、マハー・ケイマ正大師とも縁が深かったみたいで、何か変わった車みたいなもの、空も海も陸も飛ぶようなものに乗っているような生とか、いろんな生を思い出してたんですけど、ちょっともう今は忘れてしまいました。

これが、二日目から三日目にかけての体験だったんですけれども、三日目をちょうど過ぎたときに、酸素濃度がどうなってるかちょっと気になったんで、酸素消費を測定してくれていたサンジャヤ師に電話をしてしまったんです。で、そこで、酸素消費が少なくキープできているというのを聞いて、安心したというか、甘えが出てしまったんですね。それで、今までずっと肉体はここにあるんだけど心だけが宙に浮いているような感覚だったんですけれども、ここで、肉体と心がある

程度合わさってしまったような感じになってしまって、そこからバルドーがすごく変わり始めたんです。

◉地獄・動物・餓鬼の体験

四日目に入ってからの体験では、急にもうヴィジョンと心の状態が激変しました。まず、マニプーラ・チャクラがものすごく痛くなってきました。今まで食に対する厭逆の瞑想を強く行なっていたので、食に対する煩悩というのはすごく少なかったんですけれども、つまり断食していても食べ物を食べたいっていう意識はなかったんですけど、飲み物に対してすごく「飲みたい、飲みたい」というような意識が出てきてしまいました。それと同時に、本当に胃が焼けるように痛くなって熱くなって、で、普通に座法が組めないぐらい、うずくまらなくてはいけないぐらいになってしまったんです。で、これは、餓鬼の体験をしているんだなっていうふうに思いました。

その餓鬼の体験が終わるや否や、すぐにスヴァディスターナがものすごく痛くなってきて、いろんな動物が出てきて、スヴァディスターナの痛さと同時に、動物のヴィジョンがいろいろと出てきました。これは、自分の邪淫のカルマの浄化をしているんだと思うんですけれど。

で、これが終わった瞬間に、次は足がものすごく冷えてきました。チェンバーの中というのは温度調節ができるので、自分でもある程度ちょうどいい温度にしてたんです。で、初め入ったときは熱かったので温度を下げたんですけれども、それの影響ではなくて、根本的に体が冷え始めてしまって、足がものすごく氷のように冷たくなってきたんです。それで、それだけではなくて、足の先からだんだん根元にかけて痛みが出てきて、昔わたしはリューマチだったんですけれども、そのリューマチのときとそっくり同じような痛さがまた甦ってきたんです。で、本当にこれは痛くてどうしようもなくて。「肉体はわたしではない」というような強い観想をしていたんですけども、それでもどうしようもなくなってきました。

まさにもう地獄の体験が始まったわけです。そのときちょうど、本当にものすごいタイミングで尊師から電話がかかってきまして、もうすべてわかっていらっしゃるかのように、今下位のバルドーの経験をしているから、今生わたしが行なった殺生から始まって邪淫や偸盗に至るすべての悪業のザンゲをしなさいというふうなアドバイスをいただいたんです。そこで、わたしはもうひたすらザンゲをするようにと言われたので、ザンゲを始めたんです。

それで、そのザンゲをしてるときなんですけれども、ものすごく苦しいんですね。今まで、ザンゲをするのがここまで苦しいという体験はなくて、わりと平気で尊師に対してもザンゲできていたんです。一般的な修行を行なう上でのザンゲというのも確かに苦しいときもあったんですけども、そんなに大したことはなくて、ここまで本当にザンゲというのが苦しいことっていうのはなかったんです。

で、その一つ一つのザンゲを行なうときに、自分の本当にけがれた部分と真理とが葛藤して、一枚一枚悪業をはがすときのすごい苦しさというのがわき上がっ

てきまして、一つザンゲするのにもものすごく時間がかかりました。それと同時に、吐き気がものすごくて、もちろん何も食べていないから何も出ないんですけれども、ものすごい吐き気がしました。それだけ、自分の心を変えるということに嫌悪が生じてるんじゃないかと思ったんですけれども。本当に座法も組めずに、半分のたうちまわりながら、ザンゲをしてました。

なんかわたしってやっぱりこういう経験っていうのが（苦笑）、カルマなんでしょうか、必ず何かの修行のときには出てくるんですけれども。

で、この三悪趣の体験というのが、かなり長く続きました。実は、このことについては、わたしも心当たりがあるんです。このサマディに入る二週間ぐらいか十日ぐらい前に尊師から修行のアドバイスをいただいたときに、わたしは、今生今まで行なってきた悪業とそれから尊師に巡り合ってからの修行で積んだ善業があまりにも極端だから、その極端でのカルマの蓄積をしていると言われたんですね。

要するにけがれているところはすごくけがれていて、で、浄化されているところはものすごく浄化されていると。だから、これからの君の修行というのは、「出罪の瞑想」、けがれている部分を徹底的に浄化するようなザンゲの修行が必要だっていうふうにアドバイスいただいて、わたしはその日から少しずつザンゲをするようになっていたんです。

で、そのザンゲを始めてから二日後ぐらいから、わたしの瞑想、バルドー体験が一変しました。今までは瞑想すると体が固定されて、変化身が抜け出す体験をするときには、人間とか人間以上の天の世界の体験をしていたんですけれども、この日を境に、三悪趣の体験しかしなくなりました。

例えば、変化身に意識が移ってバルドー体験をすると、尊師はもう地獄だとおっしゃるんですけども、手足をもぎ取られるようなヴィジョンだとか、ものすごく怖い、要するに低位霊界に引きずり込まれるようなヴィジョンだとか、そういうようなものがほとんどになってきました。

で、それを尊師にご報告したら、今生君が落としていかなくてはいけないカルマ、要するに未来において現象化するカルマというのを先取りして経験しているんだから、それはいいことだっていうふうにおっしゃっていただいて、で、今回もサマディで、まさにそのバルドーを経験したんだと思うんです。

で、考えてみると、サマディというのはわたしたちの風のエネルギーが最も強くなるときで、その風がナーディーを通過していくときに、その引っかかったナーディーの部分の経験をすると。その経験を早くすればするほど、そのカルマというのは早く落ちるんだなということを、今回その出罪の瞑想を始めて、そしてこの今回のサマディに至るまでで、実感しました。

◉修行をすればだれでもサマディに入れる

この三悪趣の経験というのが、四日目、それから五日目の初めぐらいまで続いた後に、五日目になってから悪魔と闘うヴィジョンが出てきました。これが最後

のアストラル体験なんです。破滅天だというふうに、自分で名乗っているんですけれど、ものすごく大きくて、黒くて、しっぽが生えていて、その破滅天と対決しているんです。そこで、尊師が破滅天に勝つためのマントラというか、呪文みたいなのを教えてくださって、そのマントラを必死で唱えているようなヴィジョンが、最後のヴィジョンでした。

で、まあその後も、瞑想を続けていたんですけれども、全くザンゲと関係ないときの瞑想はものすごく集中できて、そうじゃないとき、つまりザンゲの瞑想のときはものすごく心が揺れて、心だけじゃなくもう呼吸も乱れました。だから、たぶん四日目から五日目に関しては、ほとんどサマディに入れなかったような状態でした。

だから今回、本当に自分の煩悩、それから引っかかりの証智、つまり知ることができたことはすごくありがたい経験だったと思います。それから、サマディに入るためには、尊師がいつも言われている八正道（はっしょうどう）の実践、もしくは六つの極限、

六波羅蜜の実践というのを一つ一つクリアしていくことによって、確実に入れるものであるということを確信しました。

また逆の言い方をすれば、そういう積み重ね、土台を固めない限りは、内側の体験というのはできないんだなということを改めて証智させていただいて、今後とも、奉仕から始まって、戒律の遵守、修行に対する奮闘努力に至るまでを確実になしてくことによって、次に入るアンダーグラウンド・サマディではもっと高い経験ができるようになりたいと思います。

◉サマディはかっこいいもんじゃない

（尊師）はい。いつもね、サクラー正悟師の体験っていうのは、なかなか共感を覚える体験で、君たちの最も好きな体験談じゃないかと思うんだけれども。

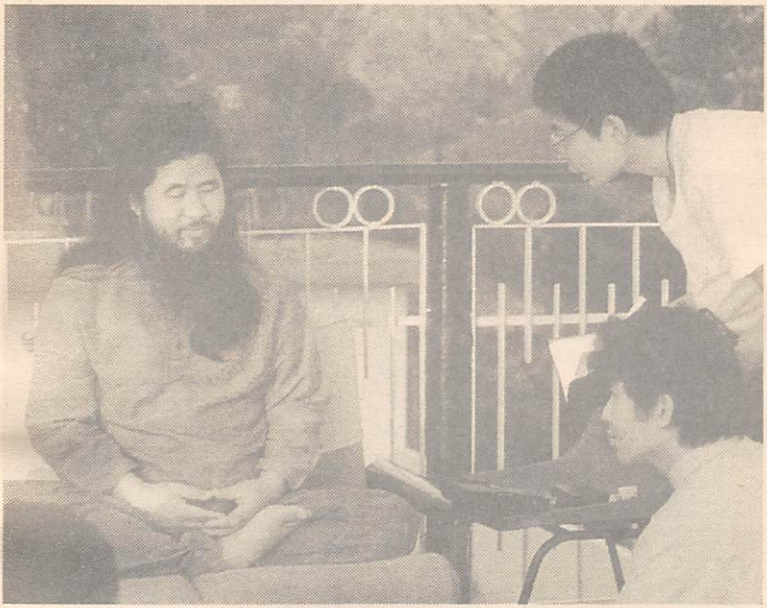
まあ、もともと『マハーヤーナ』（オウム出版）にサクラー正悟師の体験談が出ると、必ずトップに立つぐらいの人気が出るという編集の調査があるわけだけ

ど、これはサクラー正悟師の体験そのものが、ある意味で赤裸々に苦悩、修行における苦悩と、修行の必要性を語ってくれているがための結果だとわたしは思います。

ここで、一つ考えなければならないことは、まあ、サクラー正悟師の言ったとおり、わたしたちは、経験の構成を見る、これがサマディなんだということを認識しなければならない。

ここで問題になってくるのは、サマディはかっこいいもんじゃないと。つまり、サマディというのは、わたしたちが日々行なっている身・口・意の集積、この集積を経験するにすぎないと。

普段わたしたちの意識というものは、外側に向いている。しかしサマディに入ると、その外側に向いている意識が内側に入る。で、内側に入った段階で、どのような要素を自分自身が持っているのかを理解する必要があるわけだけど、その理解することがサマディである。



弟子たちに法を説く麻原尊師。その真理の法を実践することによって、
彼らは、サマディの体験をすることができるのだ。

そして、最終的にそのけがれたデータをすべて捨断して止めてしまった状態で、本当のサマディ、本当のクリアな状態になるんだということだね。で、その本当の状態、本当のクリアな状態になることこそがサマディであり、そうなるために日々実践しているんだというわけだけど。

ま、例えば今四十人の極厳修行者が修行しているわけだけど、彼らはそれぞれがある人は体験がない、ある人は風がどんどん上昇して体験をするという差が出てきている。これはまさに、日々のサマナ生活において、そのサマディに入って内側の経験をするだけの準備をしているかどうかにすぎないのである。

よって、ここにいるサマナも当然、二月、四月、六月、八月、十月と、この期にすべてね、修行に入り、クンダリニー・ヨーガの成就を与えるつもりでいるわけだけど、下向する可能性がある。

では、そうならないためにはどうしたらいいのかと。それは日々の修行において、供養・ザンゲといった土台、これをしっかりと蓄積することによって、内側

のピュアな部分、これを増大させる、そしてサマディの修行に入ったときに内側に徳の経験、これをどんどんどんどんできるようにしない限り成就はあり得ないだろうし、ただ単に「クンダリニー・ヨーガの成就をしたい、クンダリニー・ヨーガの修行をしたい」、イコール、下向ということになってしまう。

◉サマディとは〝死〟だ

ではなぜサマディにはそれだけの力があるんだと。サマディというのはね、一言で言うと〝死〟なんだよ。死とはどういうことかというと、例えばだよ、わたしたちが死ぬと。で、わたしたちは欲界の経験しかしていないから、当然中間状態に入ったときに欲界のバルドーに入ると。そして、わたしたちが前世において、つまり死ぬ前の生において蓄積した身・口・意の集積、これによって次の転生をするわけだね。

例えば憎しみの修習をしている人は、その憎しみというものが優位に立って転

生する。まあ、例えばサクラー正悟師の例を挙げるならば、プレータ、つまり低級霊域（餓鬼）のバルドー、これは案外早く抜けたのではないかと。次の動物のバルドーが少し長くて、やっぱり一番問題なのは、地獄のバルドーだと。

しかも、彼女のその経験ですごいと思うのは、その地獄のバルドーの経験が経典どおりなわけだね。要するに体が冷えて、痛みが出てきて、バルドーに入ると。

というのは、サクラー正悟師の性格というのは、例えば怒って相手をどうするこうするということはない。しかし、例えば、殺生というのは、冷たい心の働きによって起こす殺生の経験をしているわけであって、そうなると冷たい心が体を冷やし、あるいは心を冷やし、それによって地獄のバルドーの経験をしていると。

で、これはまさに死生智の経験になるわけだね。つまり、来世の経験をしているわけだよ。つまり自己のいい部分――いい部分っていうのはオウムに入ってからのいい部分が出てくるとどうなるか、悪い部分が出てくるとどうなるかの両方の経験をしてしまったと。

で、こういうね、先輩の素晴らしい体験っていうのを自分に当てはめて、自分自身の生まれてから今までのことを思い起こし、そして何をどうしたら自分自身はそこから抜け出せるのか、それをしっかり考えて日々修行する、これが大切だね。

まさに、サクラー正悟師は〝現証〟というものをしたわけだね。つまり、自分の中にどういう要素があるかをアンダーグラウンド・サマディで経験したと。そして、ザンゲその他によって捨断をしたと。ところが、本当の証智をした後の捨断というのは――つまり、性格の傾向というのは決定されているから、なかなかしづらい。つまり、深い意識状態に入っていての捨断というのはなかなかしづらいと。ま、これは、第二の疑念の瞑想をもう少しサクラー正悟師が行なえば、もっとザンゲが楽にできたのではないかと思うわけだけど。つまり、「自分の内側に無智を背景とした疑念があるから、そのザンゲができないんだ」と。「よし、無智を捨断するぞ、無智を捨断するぞ」という記憶修習をした後にザンゲをすれば、

もっと楽だったと思うけども。

まあ、それはいいとして、この捨断をしたら次は何が起きるんだと。次は現証が起きるんだと。何が現証するんだというと神秘力と、それから離解脱だよね。つまり神通力と離解脱が起きると。

だから、今回、アンダーグラウンド・サマディに入った内容をサクラー正悟師が捨断の材料として徹底的に使うならば、次は、神通力と離解脱が生じるだろう。

――地獄・動物・低級霊域という、自分が持っている三悪趣の要素を神通力によって体験した聖者サクラー供養値魂。もちろん、功徳も高く、戯れ堕落天の神々の体験や上位形状界の神々の素晴らしい体験も数多くされているので、尊師のアドバイスどおり三悪趣の要素が捨断されれば、まさに、神々としての要素だけが残ることになるだろう。そのとき、この五日間のアンダーグラウンド・サマディよりもさらに偉大な奇跡を見せてくれることは疑いない。

◉選択するのはあなた

この後も、さらに引き続き〝連続アンダーグラウンド・サマディ〟は続けられた。もちろんそれは成功し、挑戦者たちはそれぞれ大きな修行の進歩を遂げた。

「また、不思議で面白い体験をしたのかしら？」

きっとそうワクワクされる方もいらっしゃるだろうが、残念ながら、紙面の都合で、今回は、この聖者サクラー供養値魂までにとどめておきたい。また、別の機会にぜひご紹介したいと思う。

神秘の超越世界――サマディ。

「人間って、食べ物がなくても、空気がなくても生きていけるんだ。」

と感動した方。

「わたしも、神秘体験してみたいわ。」

と思われた方。いろいろいらっしゃることだろう。あなたは、どんな感想をお持

ちになっただろうか？

いずれにせよ、大事なことは、今回アンダーグラウンド・サマディに挑戦した人々も、修行を始める前は、フツウの人だったということだ。麻原尊師に導かれて修行を続け、サマディに至り、そして神秘力を身につけたということなのである。

そう、今は、ただ単に感動しているだけのあなたも、実際に修行を始めれば、彼らと同じようにサマディに至り、人間を超えることができるのだ。

いにしえの聖者の境地に至る道がここにある。ただのフツウの人生を歩むか、それとも人間として最上の道を歩むか——その選択の鍵は、今、あなた自身が握っているのである。

あの名著がグレードアップ！

増補改訂版

生死を超える

麻原彰晃尊師の不朽の大ベストセラー『生死を超える』が、新しく増補改訂して登場！

麻原尊師の教えに導かれ、生死を超えて解脱した四十八名の弟子の体験談を、解脱へのプロセスに沿って掲載した。

麻原彰晃 著

B6判 定価1800円

オウム出版 本社 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL03(3439)6043 振替 東京2-109325
営業部 〒168 東京都杉並区宮前3-8-11 TEL 03(5370)1598

眼ある人は目覚めよ!

タターガタ・アビダンマ

麻原彰晃 著 B6判 550円

Tathāgata Abhidhamma

真理勝者 絶対最勝の法則

原始ヨーガ、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教などすべての真理を内在した史上最強の法則。日本で初めて、サキャ神賢（釈迦牟尼）が説いた全体系が示される。

第一誦品　大宇宙の実相
第二誦品　真理勝者の救済計画

以下続刊

●ご注文は書店にお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は、下記までご連絡ください。

オウム出版　本　社　〒154　東京都世田谷区世田谷2-8-17　TEL 03 (3439) 6043　振替 東京2-109325
営業部　〒168　東京都杉並区宮前3-8-11　TEL 03 (5370) 1598

マハーヤーナ・スートラ

MAHAYANASUTRA

麻原彰晃 著

解脱——それは光を超えて

魂は彷徨する、自由を求めて。
魂は飛翔した、歓喜の世界へ!!

解脱それは、一言では表現することのできない深遠で、広大な世界。今まで、曖昧に定義されていた解脱の段階と状態について、この本はわかりやすく解き明かします。真理の最終地点を目指すあなたにとって、欠くことのできない宝書。

B6判296ページ(巻頭カラー8ページ) 定価3090円

●ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。

オウム出版 (本 社) 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
TEL 03(3439)6043 郵便振替 東京2-109325
(営業部) 〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
TEL 03(5370)1598

ズバリ！ 真理のメッセージ

麻原彰晃尊師のラジオ番組

AM720kHz

εὐαγγέλιον τῆς

エウアゲリオン・テス・バシレイアス

βασιλείας

夜11時放送！

モスクワからあなたに——

「朝まで生テレビ」「ビートたけしのTVタックル」等の出演で話題独占の麻原彰晃尊師が、毎晩ラジオにのってあなたのもとへ。宗教、音楽、科学、神秘……盛りだくさんの内容と次から次への新しい発見で、眠気も吹っ飛ぶ1時間！

さあ、あなたも今日から尊師を聴こう！

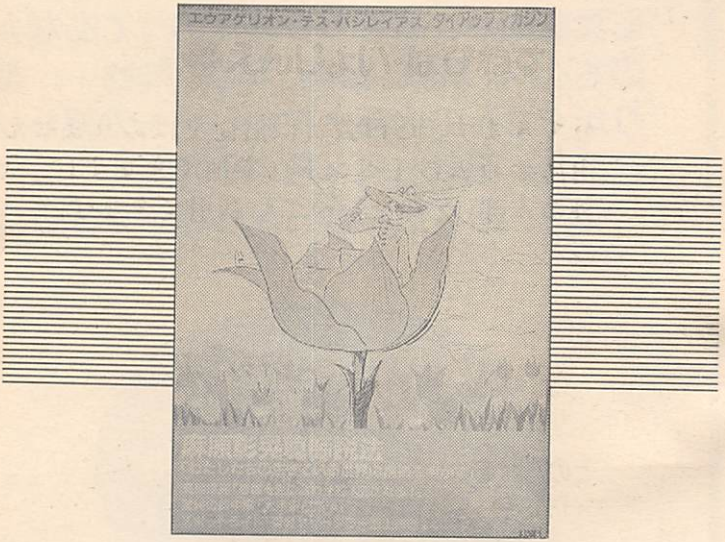
今週の聴きどころなどを毎日紹介。便利なテレホンサービスもぜひご利用を。

TEL 03 (5370) 1608

詳しいお問い合わせは、「エウアゲリオン・テス・バシレイアス」係まで。 TEL 03 (3335) 4965

エウアゲリオン・テス・バシレイアスの
タイアップマガジン

月　刊
えんじょい・はぴねす



今話題の麻原尊師のラジオ番組、「エウアゲリオン・テス・バシレイアス」がヴィジュアルに楽しめる！　ちょっとオウム真理教を知りたいあなたにも最適な一冊です。

「幸せになりたい！
でも、信徒になるのはちょっと……」
そんなあなたに贈る
最高のプレゼント！

『えんじょい・はぴねす』の定期講読を申し込まれた方は、様々な特典が受けられる〝EH会員〟になることができます。EH会員は信徒ではありませんが、自由にオウムのイベントに参加できますし、全国や海外の本部・支部をいつでも利用できます。お気軽にオウムをのぞいてみませんか？

特典の一部を紹介すると……

- ◉オウム主催のイベント、説法会等へ自由に参加可。
- ◉幸福情報を満載したEH会員手帳をもれなくプレゼント！
- ◉成就者との対面および電話による悩み相談。
- ◉各種販売物を信徒価格で購入可。

〝えんじょい・はぴねすの会〟会員（EH会員）になるには？

※入会金無料。月刊『えんじょい・はぴねす』の定期購読を申込み、料金の払い込みが確認されるとEH会員となります。
なお、定期購読の申込みは6カ月単位で郵送料込み6000円です。

※詳しくはお近くのオウム真理教本部・支部までお問い合わせください。

あなたに絶対の幸福を約束する

――オウム真理教

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい

最高の教義、最高の奥儀、そして麻原尊師のもと、すべては確実に実現します。

●オウム真理教が誇る三つの基本的修行体系

1、マハーヤーナ

現実生活をより豊かにし、幸福な人生をお約束します。ご年輩の方、仕事が忙しく時間のあまり取れない方にお勧めです。

2、タントラ・ヴァジラヤーナ

行法、イニシエーションを中心として進め、霊性を向上させて、神秘世界を実体験することができます。この修行体系を選択すれば今生で解脱し、悟ることも夢ではありません。

3、テーラヴァーダ

原始仏教の上座部仏教を再現しました。真理にのっとって清浄な日常生活を送ることによって、幸せな来世が約束されます。また、経典の記憶修習によって心の成熟が促され、悟りを得ることが可能です。オウム真理教の深遠な教義を徹底的に学びたい方に最適です。

※資料請求券を貼付けしたハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

甦る聖者伝説
資料請求券

オウムについてもっと詳しく知りたい……
教義その他について、いろいろと聞きたいことがある……
オウムの人たちの生の声を聞いてみたい……
そんなあなたに最適な情報ネットワーク

好評！あなたとオウムをつなぐ パソコン通信、"オウム真理教ネット"

面倒くさい手続きは一切ありません。オウムに興味をお持ちの方、聞いてみたいことがある方は、今すぐお気軽にご利用ください。

"オウム真理教ネット"のご紹介

TEL番号	03-5370-1726
通信速度	1200/2400bps
通信条件	BITS-8 PARITY-NONE STOP-1
プロトコル	X-MODEM Y-MODEM(-G)
ゲストID	GUEST
運用時間	24時間
入会方法	ゲストログイン後、SYSOPあてメールにて申請

●なお、その他詳細は下記までお問い合わせください。

〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
"オウム真理教ネット"事務局
TEL 03-3335-4965

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「甦る聖者伝説」読者係」までお送りください。

〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
オウム真理教「甦る聖者伝説」読者係」

◆各道場のご案内◆

富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場）03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
那覇支部　098（869）7707
〒902　沖縄県那覇市安里2-4-12 嘉数グラビアハイツ5F
堺支部　0722（21）1843
〒590　大阪府堺市海山町4丁168の9
深谷出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市荒場441-8
渋谷出張所　03（3476）5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St.#2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1,　S.R.Germany
スリランカ支部（AUM SACCA SANGHA ASSOCIATION）
Sorahena, Watta, Anglugaha, Galle, Shri Lanka

甦る聖者伝説

一九九二年六月十五日　初版発行

定　価　五七〇円
編　集　オウム出版広報編集部
発行者　松本知子
　　石井久子
発行所　株式会社オウム
東京都世田谷区世田谷二－八－一七
郵便番号　一五四
電　話　〇三（三四三九）六〇四三
振　替　東京二－一〇九三二五

乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

© AUM Editorial Staff 1992
ISBN4－87142－035－3　C0014　P570E